

聖書物語

作 良治光澤 芹

画 三郎宇原 伊



この物語の初まつた頃、イスラエルの國はユダヤとも云つて、ヘロデ王朝の第一世ヘロデ王が治めてゐたが、ローマ帝國の屬國であつた。この頃のローマ皇帝はカイザリヤ・アウグストであつて、地中海に面したあらゆる國々を領土して、ユダヤをも征服してゐた。當時ユダヤはなかなか人口が稠密で、繁華な都會も多かつた。首市エルサンは、往時ゲルバ

ベル王の建てた古い祭殿のあることで有名であつたが、荒廢してゐるのを、ヘロデ王が改築を初めてゐた。その他の都會で、新約聖書に出てゐるものは、南方の山間にあるヘbron、大海に面したガザ、ヨツパ、カイザリヤ、國の中央のシムク、サマリヤ、北方のナザレ、カナ、ガリラヤ湖畔のテベリヤ、カ

ペサウム、ベテサイダ、そして、遙か北方に雪をいただいたヘルモン山の麓のカイザリヤ等であつた。ある日のことエルサレムの祭殿で不思議なことが起きた。南方の山間の町ヘbronから出て來た祭司のザカリヤが、祭殿で禮拜の務をしてゐた時のことである。彼は敬虔な老祭司であるが、順番に従つて、主の壇所に立つて香爐に火をつけてゐた。祭殿

の庭や外には、他の祭司や參詣の人々が娯樂してお祈をしてゐたが、突然香爐の右に神の使者なる天使が現れた。ザカリヤがふとそれを見て驚愕してゐると、天使は、

「ザカリヤよ恐れることはない。そなたの妻エリサ

ベツは男子を産まふぞ。言ハネと名をつけなさい。その子はそなたを幸福にするであらう。世人もその誕生を祝福するであらう。その子は神の前に偉大な人とならう。一生滯留葡萄酒や濃い酒を飲まずに、神の聖靈にみたまされるであらう。また、多くのイスラエル人を、主なる神に歸らせ、豫言者エリヤの靈と力を以つて主の御列に行くであらう。それは祖先の心を子孫に歸らせ、背ける者に主の聖旨を行はせるためであるぞ」と告げた。

「どうしてお言葉を信じられませう。私は見る通りの老人ですし、妻も年をとつてをります」
「私は神の御前に立つ天使ガブリエルである、主の御せを受けてそなたに言つた事を知らせに參つた。さう、時が來れば必ず成就するわが詞を信じな

いによつて、そなたは嘔となつてその日まで物を云ふことができまいぞ」
人々は祭殿の外でザカリヤを待つて、彼がなかなか出て來ないのに不審を抱いたが、やがて出て來て物も云へない彼の様子を見て、祭殿の中で幻を見たのであらうとさう言つた。彼も嘔のまま、手眞似でそれを人々に傳へた。數日間のお務を終つて、ザカリヤは嘔になつて故郷の家へ歸つた。有女であつた妻のエリサベツは、男の子を授けられることを知つて主に感謝した。二人とも敬虔な信心家で、神の誠

を守るへであつた。
エリサベツが妊娠して六月目に、同じ天使ガブリエルは神から北方のガラリヤの町ナザレにつかはされて、處女マリヤの前に現はれた。マリヤはダビデ家の出である若しい大工のヨゼフの婚約者であつたが、天使は突然彼女に、

「お目出度う、そなたは恵まれた者だ、神がそなたとともにゐられるぞ」と云つた。マリヤはこの詞を聞いて驚き、體どういふ意味か訝かつてゐると、
「おそれなマリヤ、そなたは神の恵を得て男の子を産まふ。イエスと名付けなさい。イエスは偉大なものになつて神の子と稱へられるであらう。神はイエスを祖先のダビデの玉座につけてくれるであらう、イエスは王となるが、その治める國は永遠につくであらう」と、重ねて云ふ。

「私はまだ男をしりませぬのにどうして母となるなんてことが……」
「そなたには聖靈が降り、高い神の力がのぞんで、子供が産れるのだ。それ故に神の子と云はれるのだ。そなたの親類のエリサベツもお婆さんであるが、男の子を妊娠してゐる。有女と云はれてゐたのに今は六ヶ月の身重である。神のお力に不可能はないからだ」

「私は御様の婢女です。お伺通りにいたしますやう」
そこで天使は去つて行つた。
その頃、マリヤは八十哩の南方に旅立つてカザリヤの家を訪ねてエリサベツに挨拶すると、エリサベツは胎兒が躍り、聖靈にみたまされて、大きな聲で云つた。

「あなたは女のなかで最も祝福された方、あなたのお子はまたこの上もなく祝福されてゐます。その主の母が訪ねて下さるなんて、何と偉せなことです。あなたの挨拶の聲を聞くと、私の子供は胎内で喜んで踊りました。主のお詞を信じた者皆幸福です。主のお通りに必ずなりますからな」

マリヤは神様をたたへる歌(ルカ傳の處女マリヤ

の頬を見よ)をうたひ、それから三ヶ月エリサベツと起居を偕にして、家へ歸つた。

エリサベツはその後男子を産んだ。親族知友等つて、神の慈悲であると喜び、父の名をとり、ザカリヤと名付けようとしたが、エリサベツは「いいえ、ヨハネとつけて下さい」と云つてきかない。人々は

「この家には先祖のなかに、ヨハネなんて名の男はなかつたが」と云つて、啞の父親に手眞似で名前を相談すると、ザカリヤは書板を求めて「この子の名はヨハネ」と書いたので、人々は驚いたが、それと同時に、ザカリヤの啞が突然なほつて、口が利けるやうになり、神を讃美し感謝の歌をうたつたから、人々はますます怖れ伏した。その啞はユダヤの山里に隔まつた、噂をきいた人々は口々に「その子はどんな者になるだらう」と云ひあつた。ザカリヤの感謝の歌には次の句があつた。

「幼児よ、汝は至高者の豫言者と稱へられ、主の御前に先立ちゆきてその道を備へん」

ヨハネは成長すると、ユダヤの南方の沙漠に行つて修業し、やがて大豫言者バアテスマのヨハネとなつてイスラエルに現れた。(ルカ一章より)

註一 新約聖書物語は結局キリストの一生とその教といふことである。私はマタイ傳、マルコ傳ルカ傳、ヨハネ傳の四福音書を精讀して得たキリスト像を、福音書に忠實に描くことで満足して、一切批判を加へないことにした。この混沌たる時代に、福音書を精讀できたことを、私はこの上なく喜んでゐる。

マリヤの婚約者ヨセフは實直な人で、マリヤの妊娠したことを知つて、世間風をはばかり、婚約破棄をしようと思ひ、色々悩んでゐた。その時神の使者が夢に現はれて、

「ヨセフよ、マリヤを妻に迎へるのを恐れるな。胎内にやどつてゐるのは、神の子である。産れる子にはイエスと名付けなさい。イエスは神の救ひといふ意味で、世の人々をその罪から救ふからである

ぞ」と、告げた。そのお告で、ヨセフはこの子が約聖書のなかの豫言者達がしばしば豫言したイスラエルの王となる者だと、單純に信じた。(註一)

ヨセフがマリヤと結婚して後、ローマ皇帝カイザル・アウグストが勅令を出し、人民に戸籍登録するために總て故郷へ歸るやうに命じた。ヨセフもダビデの家系であるから、ダビデの故郷であるベツレヘムへ行かりとして、ナザレを旅立つた。ベツレヘム



マリヤの胎内

に泊いたが、戸籍登録にもどつた人々がおびたたくて混雑してゐて旅館もあいたところがなく、やがたく馬小屋に泊ることになつたが、マリヤはそこでお産をして、赤坊を布に包んで馬槽に寝せた。

その出産の夜、ベツレヘムの郊外に羊の群を置いてゐた牧人の收人があつたが、ふとすく前に神の使者が現れ、あたり一面輝きわたつてゐるのを見

て、思はず恐れ伏した。

「恐れるな。世界の人々に大きい救済の福音を告げに參つたのだ。今日ダビデの故郷で、救主キリストが産れた。布に包まれて馬槽に寝てゐる嬰兒が、それであるぞ」その制ととも、多くの天軍が現はれて、神の使者と合唱するかのやうに、「いと高き處には榮光、神にあれ。地には平和、主の悦び給ふ人にあれ」と、神を讃美した。

神の使者が天に歸つた時、收人は「さあベツレヘムへ行つて主のお告げになつたことを見よう」とたがひに語りあひ急いで行つて、マリヤとヨセフと馬槽に寝た嬰子とをやつとたづね出した。喜んで、

天の使者が告げたことを話したが、そばにゐた者は誰も彼等を信じなかつた。マリヤも何事も語らずに秘密にしてゐたが、收人は神の使者のお告を喜んで、神を崇め讃美しながら羊の群の方へ歸つて行つた。

赤坊は八日たつて、神の使者の命じた通り、イエスと名づけられた。

ユダヤでは最初の子供が産れると、「この子は神のもの」といふしるしに、エルサレムの祭殿に捧物をなする律法があつた。富者等は小羊を、貧しい者は

鹿をささげることになつてゐた。マリヤとヨセフも

淵の四十日が過ぎたので、イエスを連れて、エルサレムへ行つた。

その頃、エルサレムにはシメオンといふ神に仕へる敬虔な正直者が住んでゐた。嘗て神はシメオンに、「そなたは油をそそがれた王キリストを見るまで死ぬことはないぞ」と告げたことがあるが、或る日、シメオンが聖靈にみちひかれて祭殿に行つてみると、両親がイエスを連れて、その子のために律法の慣例を行はうとしてゐる。聖靈はシメオンに、「この幼児こそキリストであるぞ」と告げたので、彼はイエスを抱きあげおしいたたくやうにして神を稱へた。

「主よ、今こそ御調にしたがひて僕を安らかに遣かしめ給へ。」

わが目ははな主の救を見たり。
是もろもろの民の前に備へ給ひし者、異邦人を照す光、御民イスラエルの榮光なり」

かう語ることを、マリヤとヨセフが不審がつてゐると、シメオンは二人を祝福して、マリヤに云つた。

「この子はイスラエルの多くの人が亡びたり興つたりするために置かれたのです。多くの人がこの子にそむいて色々のことを云ひ、悲みの劍があなたの心を貫くでせう、が、それは多くの人の心の痛があらはれるためです上」(註二)

さうシメオンが話してゐるとアンナといふ老婆がはいつて来た。この老婆は豫言者で、結婚後七年で寡婦となり、八十四も寡婦であつたが、常に祭殿をはなれずに日夜、斷食と祈禱をして神に仕へてゐた。アンナも聖靈のお告げで、その幼児がイエスであ

ることを知り神に感謝して、エルサレムの帰路を待ちのぞむ人に、この赤坊のことを語つた。(マタイ一章、ルカ二章より)

註一 イエスが處女マリヤの子で貧しい大工を養父とすることは、實に深い意味があらう。

註二 他日十字架にかけられたイエスを見たマリヤを暗喩するのであらう。



三

イエスが置かれてからその両親は暫くベツレヘムに滞在してゐた。勿論馬小屋から出て他に移轉してゐたが、その頃、ベツレヘムに不思議な東方の學者達が訪ねて来た。

「ユダヤの王様は何處へお遊れになつてゐますか、私どもは東方の國でその星を見たので、拜まうと思つて来ました」と、人々に問ねてゐた。

(ヘロデ王はその學者達の噂を聞いて、自分が王位のもやうひのかと懼れた。王は祭司長や學者を求め、キリストが何處に置れるのだからかと質問した。彼等は、

「それはユダヤのベツレヘムであります。豫言者がかう申してをりますから。ユダヤの地ベツレヘムよ。汝はユダヤの群中でいと小さいものではない。汝の中からイスラエルの民を治める君が出るからだと」

ヘロデ王はそれでは大變だとして、秘かに東方の學者達を招いて星の現はれた時の慣例などを詳しく質問し、學者達のベツレヘムへ行くのを察つて、よく赤坊のことをたづねて、探してたら私にも知らせて下され、私も行つて拜みたいから」と命じた。

學者達は出發すると不思議にも東方の國で見た星が、光り輝いて彼等を導いて行き、赤坊のゐる家の上でとまつた。彼等は歡喜にふるへて家にはいり、赤坊が用マリヤとゐるのを見て、地にひれふして、上座に持参した寶の匣をあけて、黄金、乳香、没薬などの禮物を捧げた。學者達はヘロデ王の處へ歸るといふ夢のお告を受けたので、エルサレムに寄らずに他の路を通つて國へ歸つて行つた。

學者達が歸り去つて間もなく、或る夜、神の使者が夢にヨセフに現はれて、「早く起きて赤坊と母とをつれて、南方エジプトへ逃れて、お告のあるまでエジプトにとどまれ。ヘロデ王が赤坊イエスを探して殺害しようとしてゐるから」と、告げた。ヨセフは目かきめるやその夜のうちに、イエスとマリヤをつれて、慌ててエジプトに渡つたが、ヘロデ王の死ぬ日までエジプトに留まつてゐた。

ヘロデ王は學者達にたまされたことを悟ると、非常に憤つて、兵隊をやり、學者達に詳しく聞いた時を計算して、ベツレヘムとその周辺の地方の三歳以下の男の子をみな殺させた。

ヘロデ王が死んでから、神の使者は再び夢の中でヨセフに現はれて、「幼児の生命をもとめた者は死んだ、幼児をつれてイスラヘルへ行け」と告げた。ヨセフはイエスとマリヤをつれてイスラヘルに歸つたが、その時ヘロデ王の子で残忍なアケラオがユダヤを治めてゐるのを聞いて、イスラヘルに行くのを躊躇した。また夢にお告を受けて、ガリラヤ地方へ行きナザレの町へ住むことにした。ナザレはヨセフとマリヤの故郷であり、ガリラヤ地方はヘロデ王の子のアンテパスが治めてゐたが、彼は父王のやうに残忍ではなかつた。かゝりして大王のヨセフは長年ナザレに住み、イエスも成長したが弟や妹も産れた。(マタイ二章より)

四

ヤリストは三十歳までナザレに住んでゐた。三十歳までのことは唯一固まりしか、聖書に記されてゐない。それも十二歳の時のことである。(註一) 當時ユダヤ全國の習慣として、年に一度少くとも春の過越の祭にはエルサレムの祭殿へ参詣しなければならなかつたが、イエスは十二歳の時初めて過越の祭に、両親につれて行かれて、エルサレムの都を見、モリヤ山上の祭殿を見、祭禮の終つて歸る時になつても、神の家に心ひかれてゐることつてしまつた。両親はそれとは知らずに、たゞさんの道件の中に彼もゐるものと安心してゐたが、一日行つて夜に

なつて親類や知人の間にイエスがゐないのを知つて驚き、イエスはゐたかと思つたが再びエルサレムにもどつて来た。やつと三日目になつて、祭殿のなかで律法の教師達にとりかこまれ悠々と話したり質問したりしてゐるイエスを發見した。その人々はこの子供が神について廣く深い知識を持つてゐることに驚嘆してゐた。両親はイエスを見て驚き、母のマリヤは、「イエスよ、どうしてこんなことをしてゐ



るのです、お父さんと私は心配して探してゐたではありませんか」と叱つた。するとイエスは、「どうしてお探しですか、私は父の家にゐなければならぬことを存じないのでですか」と答へた。両親にはイエスの云ふことがよく理解できなかった。イエスは両親にしたがつてナザレに歸つて、平凡な生活に甘んじてよく働いてゐたが、マリヤはその後の言葉に深い意味のあることを思ふやうになつた

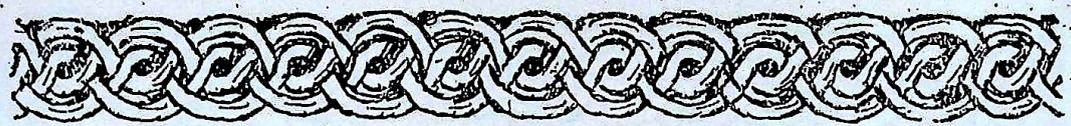
(ルカ二章による)

註一 私はイエスの修養時代とも云ふべき三十歳までのイエスを知りたいと思つたことがある。若い日のことで、イエスの青春時代を知らなければ、イエスに學びやうがないと傲慢に考へた。しかし、聖書にはこの時代のことゝ書かれてゐない。多くのキリスト傳をよみて、ヤヤ満足をおぼえたのは、ルカンのキリスト傳のみであつた。

五

これからイエスが三十歳になつてからの話である。(あの老ガカリヤの子ヨハネはイエスより六ヶ月早く産れたが、ユダヤの南方の沙漠に住んでゐたし、イエスはユダヤの北寄りナザレに住んでゐたので、三十歳になるまで會つたことがなかつたかも知れない)

その頃イスラエルは全國に、一人の豫言者が現はれて主の詞を傳へてゐるといふ評判が擧がつた。豫言者は學問をして知つたことでなく神から特に教へられる詞を語るのだといふことを聞いて、國中の人々は津々浦々から我も我もとヨルダン河の畔の荒野へ、その豫言者に會ひに翹集した。この豫言者と老ガカリヤの子ヨハネだつた。ヨハネは長年荒野に神とともにあつて、神の聲を聞いてゐたが、舊ひ起つてヨルダン河の畔で神の語つた詞を人々に傳へてゐた。ヨハネは駱駝の毛皮を膚、革帶をしめ、蛇と野蜜をとつて食べてゐた。ヨハネは豫言して、「神の國は近づいた。イスラエルの主が今に現はれる。みんな悔改めよ」と云つた。その教を聴かうと



集まる人々が「私共はどうしたらよいのでございませう」と尋ねると、

「二枚の上衣を持つ人は持たない人に一枚恵んでやりなさい。あまる程食物を持つ人は、何もなくて飢えとる人に配け與へなさい」と答へた。取税吏が来て、「私共はどうしたらよいでせう」と尋ねると、

「人を欺いてはならぬ。盗んではならぬ。律法で定まつた以上の金をとり立ててはならぬ」と答へた。長隊が来て、「私共はどうすればよいのです」と訊けば、

「人をおびやかしたり、誣ひ訴などをしてはならぬ。賈つた給料で満足してをれ」と云つた。又、パリスイ人やサドカ人が来るのを見ると、ヨハネは聲を上げまして語した。

「お前は、鯉の末裔よ、お前等は來たらんとする神の怒を避けることはできない。救はれようと思ふならば悔改めに應はしいことをなせ。お前等はアブラハムは我父だと云つてゐるが、そんなことは思つてもならぬことだ。神はここに動がつてゐる石を化してアブラハムの子供とすることもできるのだ」と。

ヨハネの言葉に感動した人々が、「私共は身を捨てて神に仕へ御心を行ひます」と云ふと、ヨハネはその人々にヨルダン河でバプテスマを施してやつた。

（川の汚れがきよめられるしるしに行ふ儀式である）それ故、人々はバプテスマ（洗禮者）ヨハネと呼んだが、或る人達は、この人が昔神様が約束したイスラエルの民を治めるあのキリストではなからうかと疑をした。ヨハネはこの疑を耳にして云つた。

「ざりではない。私は水でバプテスマを行ふが、私の次に來る者は偉いお方だ。その人は、聖靈と火で

バプテスマを施して下さる。私は隠まついてその方の靴の紐をくにも足らぬ者だ。この偉大な方は小妻と穀とをふるひ分けるやうに、人間をふるひ分けるに據かれてしまふのだ」

國中の者が集つてヨルダン河畔に來てバプテスマを受けたが、最後にイエスがガリラヤからバプテスマを受けに來た。イエスを見て、ヨハネはこの人こそ神の靈のお示し下すつた方だと思ひ、

「私こそあなたからバプテスマを授けていただからなければならぬ者なのに、どうしてあなたはここへお出なされたのです」と云つて、バプテスマをとめさせようとしたが、イエスは、

「今は許せ、われらそのやうに正しいことはみなしとけるのは當然であるから」と答へた。そこでヨハネはイエスにバプテスマを併どこしたのだつた。

イエスがバプテスマを受けて河の中から上つて來た時、イエスの頭上に天が開けて、聖靈がさぶしく鳩のやうに降つて來るのが見えた。そしてまた、天から聲がきこえて來た。

「これけわが愛しむ子。わが悦ぶ者なり」と。
「タイ三章、マルコ一章、ルカ三章より」

六

イエスは聖靈にみちびかれヨルダン河から荒野へ出て四十日間斷食して、熱心に神と交つてゐた。飢を覺える時になつて、悪魔が現はれてイエスを試みた。

「汝若し神の子ならばこの石に命じてパンとして食

べたらどうか」と、悪魔の云ふのに、イエスは「人はパンのみに生きるに非ずと、聖書（註一）には書いてあるぞ」と答へた。

悪魔は幻のなかにイエスを置いところへつれて行つて、眼前に世界中の國々とその榮華を見せて、「汝が若し俺を拜んだならばこれ等のものを悉くお前に與へるがどうか」と誘つたが、イエスは「ただ汝の主なる神を拜し、それにのみ仕ふべしと聖書には書いてあるぞ」と、答へた。

悪魔はまたイエスを幻のうちにエルサレムへつれて行き、祭殿の頂上に立たせて「汝が若し神の子ならば此處から飛降りてみよ。聖書には、神が天使達に命じて汝を守らせるから、天使達は手に手に汝を支へて足を石でうたないやうにすると、書いてあるではないか」と云つた。イエスは「聖書には、主なる汝の神を試みてはならぬと書いてあるぞ」と、答へてそれを拒んだ。

悪魔はあらゆる誘惑をしてからイエスから去つた。そこでイエスは荒野からヨルダン河へ下つて、タニヤの町へ行つた。すると、洗禮者ヨハネがイエスの姿を見て「世の罪を負ふ神の小羊を見よ。私が我に後れて來る人は、私よりも偉大な人だと云つたのはこのお方だ。この人とそ眞の神の子だ」と云つた。

翌朝、洗禮者ヨハネは二人の若い弟子とともに河邊に立つてゐる時、イエスが通りかかるとを見て、「この人とそ神の小羊だ」と讚美した。それを聞いて、二人の弟子はヨハネのもとを去つてイエスに従つて行つた。イエスは二人の若者へ振り向いて、何を

求めるか」と尋ねた。



「先生は何處へお泊りですか」
「来たれ、さうすれば分る」

二人はイエスについて宿まで行き終日話を聞いて、この人とイエスの救主だと信じて四時頃お暇した。二人はガリラヤから来た漁師の子で、アンドレとヨハネであつた。二人とも弟があつた。アンドレの弟はシモン、ヨハネの弟はヤコブと呼んだ。

アンドレは弟を見るなり、「僕はあのイスラエルの主になるメシヤ、イエスに會つたよ」と云つて、弟をイエスのところへつれて来た。イエスはシモンを見て、まだ名のないうちに「まあお前はヨハネの子のシモンだな。これからペテロといはれるだらう」と云つた。(この時からシモンはペテロと呼ばれた)

翌日、イエスは故郷に近いガリラヤに往かりとて、湖畔から訪ねて来たピリポといふ青年に會つて、「我に従へ」と云つた。それでピリポは四日目の弟子になつたが、彼は友人のナタナエルを伴つてイエスのところへ来た。ナタナエルは湖畔のカナの人で、ピリポが彼に「僕等はモーゼが律法の中に書いてある預言者達が救主といつてゐる人に會つたよ。ナザレから來られたイエスだ」と、話した。「ナザレのやうな處から、何でそんな人が出るもんか」と、ナタナエルは信じなかつた。しかし、ピリポは無理に彼をイエスのところへつれて行つたのだつた。イエスは彼を見るなり云つた。

「これこそ眞のイスラエル人だ。」
「どうして私をご存じますか」
「ピリポがお前を誘ふ前に私はちやんと見たよ。お

前が無花果の木の下にゐたのを。」
ナタナエルは無花果の木の下にゐた時誰も見てゐなかつたので、驚いて云つた。

「あなたは神の子です、イスラエルの王です」
「お前は無花果の木の下にゐるところを見られたからとて私を信ずるのか。そんなことよりもつと大きなことを見るであらう」と、イエスは答へて、躊躇しながら言ひ加へた。「お前は天が開けて、神の使者が神の子の上のほり下りするのを見る時が來るだらう。」(マタイ一章、マルコ一章、ルカ四章、ヨハネ一章より) (註二)

註一 聖書とは舊約聖書である。當時舊約聖書は聖典として總ての者が讀んで、その律法をまもつてゐた。

註二 この部分は四福音書で可成り相違した點述があつて、面白い部分であるが、そしてどれも眞實であらうが、私は主としてヨハネに據つた。(つづく)

ホマリヤの頌 (ルカ第一章)

「マリヤ言ふ『わが心、主を崇め、わが靈は、わが救主なる神を喜び奉る。その婢女の卑しきをも頌み給へばなり。』
願上、今よりの萬世の人、われを幸福とせん。全能者、われに大なる事を爲し給へばなり。その御名は聖なり、その權柄は代々、畏み恐るる者に臨むなり。神は御腕にて、權力をあらはし、心の念に高ぶる者を散し、權勢ある者を座位より下し、卑しき者を高くし、飢ゑたる者を豊かにし、飽かせ、富める者を空しく去らせ給ふ。また我らの先祖に告げ給ひし如く、アブラハムと、その高とに對する憐憫を、永遠に忘れじとて、僕イスラエルを助け給へり」

微風 (五三頁より)

疎開者がお兼に言つた。お兼は昂に目を向けた。
「澄ちやんに教へられて、お藤さん、一生懸命にお百姓を覺えてるとみえるわね」

「百姓の出來ねえ藤は、村ぢや軽く見られるんだんや」
「慣れるまでは大變でせうね」
「氣持のええ藤だと、村では評判がええんだんべ」
身内としては、それを心からよろこばねばならぬ筈であつたが、お兼の顔はそれほど晴れ晴れとしなかつた。何か納得しなかつてゐる風であつた。何の屈托か。

「思ひなしか、代助さんが薪を背負つてかへつていく足取も軽いわね。お澄ちやんさへうまくいけば、あとは文句なしよ。子供たちは新しい母親を珍しがつて、さぞつきまつてゐることせう。あたしにも経験があるけれど、撫母つて一徹に悪くは思へないの上」
お兼はなほも歩みを眺めてゐた。悲劇を好む人間がここにもゐると、細君は微笑でお兼を見あげた。お兼自身にはそんな心のあることには少しも氣が付かないだらう。

「あの嫁はからだか弱さうだからね。心配だんべ」
言葉とは、よくよく心の一部を露るにすぎなかつた。
青い鳥がちりちりと風にそよいだ。(了)

☆次號小説豫告

作家 雲のゆくへ 北條 誠
進 靴 芝木好子
新 胡麻の洞窟 丸岡 明



新約 聖書物語

第二回

七

イエスはヨルダン河畔で弟子になつた僅かな人々とともに、ガリラヤ湖畔の**カナ**の町に出た。母の知人の家に結婚式に招かれてゐたからである。この土地では結婚式に、親しい客を招いて、四五日も酒宴をはる習慣があつた。イエスの母はさきに行つてイエスを待つてゐた。酒宴なかばに葡萄酒がつきた。イエスの母はイエスに神の力をあらはしてもらはうと、「もう葡萄酒がなくなりましたよ」と云つて、奇蹟を求めた。(註一)

係があらう。我が時未だ來たらず」と、答へたのみだつた。(註二) それにも拘はらず、イエスの母は下僕に、「何でもイエスの命するまににささい」と、云ひつけた。(註三)

その家には、六斗のやうな大きな石の水廻があつた。ユダヤ人は食事の前に手を洗つたり、出先からどると足を洗ふ習慣があつて、水廻にはいつも水をみたしておくのであるが、イエスは宴なかばに下僕に、「この水廻にいつばい水を入れて下さい」と云つた。下僕は云はれるままに六個の石廻に練までいつばいに水をついだ。イエスは暫くして、「この水をぐんで饗宴長に持つて行きな



さい」と、下僕に命じた。下僕達が瓶の水をぐんでみると葡萄酒に變化してゐた。饗宴長はこの葡萄酒の秘密を知らないのので、一寸なめてみて素晴らしい葡萄酒であることに驚き、新郎をよんで云つた。「たいていの人は最初にいい葡萄酒を出して、酔のまはつた頃に、品質の悪い葡萄酒を出すか、貴方は上等の葡萄酒を今までしまひこんでおきましたね」と。

かうして、イエスは最初の奇蹟をカナで行ひ、神の子である力を現はしたが、それに依つて弟子達もイエスを信じた(註四)

良治光澤芹

畫 郎 三 宇 原 伊



ルナ、終結式

結婚の祝宴が終つて、イエスは母や弟や弟子達とともに、ガリラヤ湖畔のカペナウムに行つた。

そこ二日滞在して、過越の祭が近づいたのでエルサレムへ赴いた。過越の祭とは、昔神がイスラエルの民をエジプトから救ひ出したことを記念する祭典である。

イエスがエルサレムの祭殿に上ると、大變な人出で、境内には犠牲にする牛、羊、鳩を賣る者、諸方から集る人々のために兩替をする者などがいっぱいで混雑をきわめて、禮拜の場所のやうに見えない。イエスは突然憤怒にもえたやうに脚をたくつて、これを振りまはし、商人や牛や羊を境内から追ひ出した兩替屋の店敷を倒し、金をなげ散らし、ぐづついてある商人に怒鳴つた。(註五)

「こんな物はみんな持つて行つてしまへ。わが父の家を商賣の場所としてはならんぞ」

ユダヤの官吏達は犠牲を賣り兩替をして儲けてゐたので、この様を見て憤り、

「お前はこんなことをするからには、この祭殿を治める權威を神から授かつてゐるからだらうが、その證據を見せろ」と、詰つた。

「よろしい、この祭殿をこほしなさい。私は三日のうち立派に建ててみせやう」と、答へた。(何といふ神らしい大膽な詞であらう)

「この祭殿をつくるのに四十六年も費してゐるがまだ完成しないのに、お前は三日でつくるのか」と、風倒した。

しかし、イエスはモリヤ山上の祭殿のことを云つたのではなく、己の身體こそ神の宮であり、神は己の中にあるといふ確信から、さう云つたので

人は水と靈とを以てて生れしものなり

あつた。後にイエスが死して甦つた時、弟子達はこの時の詞を思ひ出して、益益イエスを信じたが

過越の祭の間、イエスはエルサレムになつて、神の子たる靈を多くあらはしたので、人々はイエスを信じた。或る夜、ユダヤの高官ニコデモが人目をしのんで訪ねて来て、

「私共は貴方が神から遣はされた師であることを信じます。神が借に、いさなければ、貴方のなさつたやうな不思議は誰もできません」と云つた。

「よくお聞きなさい、人はあらたに生れなければ、神の國を見ることはできない」

「より大きくなつてゐる人がどうして生れかはることができませう、再び母の胎内にはいつて生れなはずといふやうなことが」(註六)

「よく聞きなさい、人は水と靈とによつて新に生れなければ、(註六) 神の國にはいることはできない。肉によつて生れた者は肉である、靈によつて生れた者は靈である。お前達は新に生れかはれと私の云つたことを怪しんではならぬ、風は好きなやうに吹いて、お前達は風の聲を聞くが、風が何處から来て何處へ吹き去るか知らない。すべて靈によつて生れる者もそのやうである」

「どうしてそんなことがあるのでせう」

「お前はユダヤの師でありながら、こんなことを知らないのか。よく聞きなさい。私は知ることを照り、また見たことを證す、それなのに、お前達は

その證を受けない。私が地上のことを話しても信じないのに、天上のことを話したとて、どうして

お前達は信じやう。

天から降つた者、即ち人の子の他に、天に昇つたものはない。昔モーゼが荒野で蛇をあげたやうに、人の子もまた擧げられやう。それは凡て信ずる人達が、それによつて永遠の生命を得るためである。神は信する者に永遠の生命を與へるために一人の子を遣はされたほど世の人を愛してゐる。神はこの世を審判かんがためにその一人子を遣はしたのではなくて、一人子によつて世を救はんがために遣はし給ふたのである」

ニコデモは用心深く夜明に引上げて行つたが、彼は光に向つて立去つたのだ、恩寵は長い年月を通じて徐々に彼を鍛へ上げた證據をイエスの最後の日に示すであらう。(ヨハネより)

(註一) 母が子を産まない哀しい一例である。

(註二) 何と嚴肅の詞であらう。母のもとめたことは神を試みる惡魔の詞にも等しい、それ故に、きびしく神の詞で答へたと思はれる。

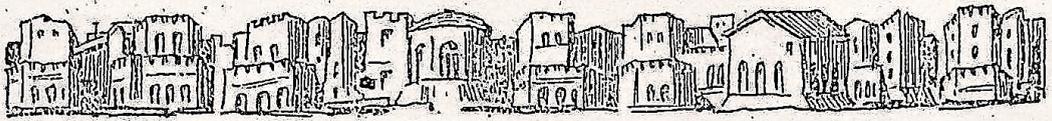
(註三) それにも拘はらず、かう云ふマリヤの無知は、不信にも似てゐるが、又、キリストの孝心に自信を持つてゐたから、かう云つたのであらうか。既に神の力を見たからであらうか。この一語に、マリヤのいそいそした様子が鮮かに感じられる。

(註四) 奇蹟を見なければ弟子達も信じなかつたのであらうか、弟子達をして一切をすてて神のお召に應ずるやうに用意したのであらうか。

しかし、キリストの最初の奇蹟が、まことに陽氣に非「精神的」なことであつたのも面白い。

(註五) 彼の弟子達は榮氣にとられてゐたのであらう。その眞似をしなかつたらしい。彼が愛

あつた。後にイエスが死して甦つた時、弟子達はこの時の詞を思ひ出して、益益イエスを信じたが過越の祭の間、イエスはエルサレムになつて、神の子たる靈を多くあらはしたので、人々はイエスを信じた。或る夜、ユダヤの高官ニコデモが人目をしのんで訪ねて来て、「私共は貴方が神から遣はされた師であることを信じます。神が借に、いさなければ、貴方のなさつたやうな不思議は誰もできません」と云つた。「よくお聞きなさい、人はあらたに生れなければ、神の國を見ることはできない」



だといふことを知つてゐなかつた、この激怒のうち、子に對する愛を見分けもしなかつたやうである。

(註六) 洗禮を受け、神の靈を宿さなければといふ意味であらう。

八

イエスが弟子達とともに、エルサレム地方で神の道を説き、バプテスマ(洗禮)を施してゐたが、洗禮者ヨハネもまたサリムに近いアイノンで教を説きバプテスマを施してゐた。しかし人々は洗禮者ヨハネを去つてイエスの許に集るので、ヨハネの弟子には心よからず思ふ者もあつた。洗禮者ヨハネは弟子達をいませした。

「私はキリストではない、その前に遣はされた者にすぎないと、かねがね話したではないか。イエスは必ず來るであらうし、私は渡へる、それが又私の喜びでも願ひでもある」と。

それから間もなく、洗禮者ヨハネはガリラヤ地方の王(ヘロデ)に捕へられて獄に投じられた。

(ヘロデ王はヘロデヤスといふ女を妻に迎へたが、ヘロデヤスは自分の夫を去つてヘロデ王の妻となつた。ヨハネはヘロデヤスのやうな好悪な女を妻にしてはならぬとヘロデ王に厳しく忠告したので、ヘロデヤスはヨハネをにくみ殺さうとしたが、ヘロデ王はヨハネの偉大さを知つてゐるので殺害することはできず、さりとて妻の機嫌を損ずることもできないで、死海の東方の山中の獄にヨハネをつないだのだつた。)

イエスは洗禮者ヨハネが投獄されたと聞いて、

弟子達とエルサレム地方を去つて、北方のガリラヤに向つた。南方のエルサレムと北方のガリラヤとの間には「サマリヤ」といふ土地があり、その住民はユダヤ人を敬視してゐた。サマリヤ人はユダヤ人と同じ神を信じてゐたが、他に自分達だけの宮を建ててサマリヤだけの祭司をつた。サマリヤ人とユダヤ人とは互に口もきかないほど憎みあつてゐた。従つて、ユダヤ人は南から北へ旅行す



るにも、北から南へ旅するにも、サマリヤを避けて、廻道をして、山を降りヨルダン河に出て、河に沿つて旅をするといふ不便をしのいだ。

しかし、イエスはエルサレムからガリラヤに出る時は山を越えて一直線にサマリヤを横切つた。或る日、イエスはゲリジム山の麓のスカルトといふ町に近い泉のそばで休んでゐた。この泉はイ

スラエルの先祖のヤコブの掘つたもので、ヤコブの泉と呼ばれてゐた。イエスは長旅に疲れてもをり、正午頃のこととて空腹でもあり、弟子達は町へ食物を買ひに行つてゐたので、恰度泉に來たサマリヤの女に、

「私に一杯水をめぐんで下さい」と頼んだ。

女はイエスの様子を見て、ユダヤ人であることわざと、あなたはユダヤ人なのに、サマリヤの女にどうして水をのませてくれなんて仰有るのですか」と答へた。

「若しお前さんが神の賜物を知り、お前さんに飲み物をくれといふ者が何者であるかを知つてをれば、お前さんの方から求めて、その人はお前に生きた水を與へるであらう」

「生きた水と仰有るが、この泉は深いし、あなたには汲む物を何も持つてゐられない、一體その生きた水を何處から汲んで來たのです。この泉を掘つてくれたヤコブ様より偉いお方ですか」

「この泉の水は飲んででもまた渴ぐが、私の與へる水を飲む者は永遠に渴ぐことがない、私の與へる水は飲む人の心に泉となつて、限りない生命が湧いて來ます」

「それでは私が渴ぐことなく、又ここに汲みに來る世話がないやうに、その水を下さい」

「行つてお前の夫をこゝへつれて來なさい」(註一)

「私には夫はございません」

「ようこそ夫がないと云つた、お前は五人も夫をかへたが、今る男はお前の夫ではないやア」女は吃驚して「あなたは預言者です、教へて下



さいませ、私共は先祖代々この山の上で神を拜むが、ユダヤ人はエルサレムに拜みに行く、どちらが正しいこととせうか」と、聞いた。

「私の云ふことを信じなさい。今に人々がこの山でもエルサレムでもない處で父なる神を拜む時が來ます。今はもうその時です。禮拜者の聲と眞とをもつて父なる神を拜む時が來ます、今はもうその時です。神は姿であるから、拜む者も聲と眞とをもつて拜まなければならぬ」

「私はキリスト様といふ救主が來られるといふことを知つてゐます。その方がおいでになつたら、何でも救へていただけるのでせう」

「お前さんと語つてゐる私が、その救主です」**(註二)**

その時、弟子達が町から戻つて來て、イエスがサマリヤの女と語つてゐるのを訝かつたが、その語を問ふ者もなかつた。女は水を汲みに來たが不思議な人にひきつけられて水を汲むことも忘れ、水甕をのこして町へ行き、「みんな來て、こらんなさい、私のことをすつかり云ひかてた人がゐますよ。その人はあの待望中であるキリストぢやないかしら」と、囁したてた。町の人々はイエスを見上りて集つた。

その間に弟子達はイエスに買つて來た食物をすめた。しかし、イエスは「私にはお前達の知らない食物があるから」と云つて、さつきまでの飢も沢も忘れたやうである。

「誰か食べる物を持つて來たのかしら」と、弟子達は互に云つた。イエスは、

「私にはお前たちの知らない食物がある。私を遣

はした神の意思を行ひ、神の御業をなしとげることが、その食物である。お前達は收獲まで四ヶ月あるといふのか。しかし日を上げて田の面を見渡せ。もう熟はんで、刈入時になつてゐる。刈り入れたらば糧を受けて、永遠の生命の實を集めることができる」**(註三)**

先の女が多くの人をつれて泉にもどつて來ると人々は「町に來て皆に教を説いて下さい」と異口同音に云つた。イエスは人々と町へ行つて、そこに三日滞在して、教を説いた。イエスの詞を聞いて人々はイエスを信じ、女に云つた。

「自分たちが信ずるのはあんたがあつたからではない、親しく聴いて眞に世の救主であるを知つたからです」と。**(ヨハネより)**

(註一) いつも意外な人々を信服させるためには同じ方法が用ひられる。ナタナエルに「我れ汝が無花果樹の下にゐるを見たり」といつたやうに、彼等の生活に就いて有する洞察力、彼等の裡に入りこみ生存の内奥に坐りこむ能力を、彼等に示すのだから。

(註二) イエスは何人にも告げなかつた秘密を傳へるのに、五人の夫を持ち現在一人の情夫をもつやうなこの女を選んだ。ここに深い意味がある。

(註三) その意味は、さつきは女は悪いことをして來たらうが、イエスの詞をきくと心を持つてゐる。何處の土地の人も、收穫を待つてゐる川の水のやうに、膝を得、救ひを受けようとする心を持つてゐる、といふ意味ださうである。

しかし私にはよく分らない。

イエスはそのから北方ガリラヤ湖畔のカナに行つた。昔て水を葡萄酒にしたことのある土地なので、イエスが再び來たといふ噂がひろまつて、奇蹟を行ふ豫言者を見やうと大群な騒であつた。その時、ガリラヤ湖畔のカペナウムの町に、ヘロデ王の高官で有名な貴族が住んでゐたが、子供が患で助からないほどであつたのを、イエスに請けてもらはうと、カペナウムからカナへ馬で山を越して行つた。イエスに會つて、カペナウムに來て救つて欲しいと頼んだ。

「お前たちは隨處と奇蹟を見なければ、私を救主だと信じない」

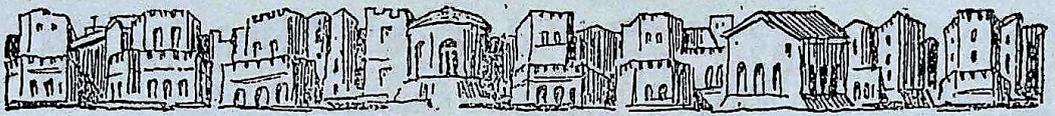
「主よ、子供の息のあるうちにおいで下さい」

「隨いなさい、お前さんは助かつたよ」

その人はイエスの詞を信じて隨路について、翌日途中で下僕達に會つた。彼等はその子供の助かつたことを告げた。そのなほり初めた時刻を聞くと、「昨日の午後一時に熱がさがつた」といふ。それはイエスが「お前さんは助かつたよ」と云つた同じ時刻であるので、その貴族も家人もみなイエスを信ずるやうになつた。

これはキリストがガリラヤで行つた第二の奇蹟である。

イエスは故郷のナザレに行つた。ここには弟妹や知友がまだ住んでゐた。安息日になつて、イエスは昔て若い日に禮拜に行つたユダヤ教會に行つた。今やイエスは大工ではなく、豫言者だと奇蹟を行ふとか、各地方で大評判だつたので、人々



は奇蹟を見やりとして、そのユダヤ教會に集つて来た。いよいよイエスは聖書を朗讀するために起ち上つたが、聖書係が豫言者イザヤの巻物を渡した。イエスはその十六巻をひろげて讀みあげた。「主の御褒れに在す。これ我に油を注ぎて替しき者に福音を宣べしめ、

我を遣はして囚人に赦を得ること、盲人に見ゆる事とを告げしめ、

既へらるる者を放ちて自由を興へしめ、

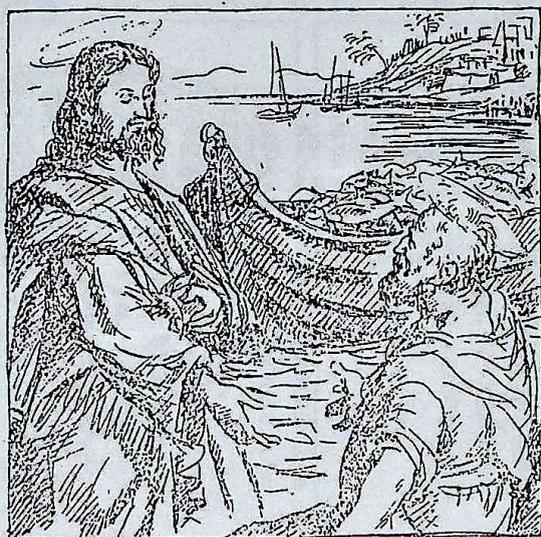
主の喜ばしき年を宣傳へしめ給ふなり」

イエスは讀み終り、巻物をまいて係りの者にわたして、坐につき、「今讀んだお前は今日皆さんの前に成就しました」と、云つた。それから、イエスは自分がどうして合しい人に福音をのべ、囚人を赦し、盲人の目を開き、憂ふる者を慰め、神の恵を人々に施るために遣はされたか、詳しく語つた。最初は人々もその深い詞に感心してゐたが、そのうちに、「なんだ、大工の手ぢやないか」と、眩く者が出た。(註一) 又、「他處ぢや奇蹟を行つたといふ評判だが、此處ぢや何もできないぢやないか」と、不平を云ふ者も出た。

イエスは人々の心を知つてかう云つた。

「君達は私がかペナウムの貴族の子にあらはしたやうな奇蹟を見たのであらう。さもなければ、信じられないと云ふのであらう。しかし、ほんたりのことを云へば、豫言者は故郷ではいれられないものだ。諸君は豫言者エリヤが云はれたことを思ひ出すがよい。その頃三年半も雨が降らず、天が閉ぢて暗く、全地にひどい飢饉があつて、夥し

い人が餓死した。その時、イスラエルには夫をなくした寡婦が數へきれないほど澤山あつたが、神はエリヤをその一人にも遣はされずに、唯ユダヤ國外のシドンの近くの町ザレバタにゐた一人の寡婦の許へ遣はされただけである。また豫言者エリヤの時のことだが、イスラエルには痲痺患者がたくさんゐたが、なほされたのはただユダヤの國でないシリヤ人のナアマンだけだつた」



人々はこれを聞いて非常に憤り、騒ぎ出してイエスを捕へて戸外にひきずり出した。それだけで満足できずに、町の一方にそびえる山の頂につれて行き、そこから谷底へ突き落さうとした。しかし、イエスは神力を發揮して、人々の間をするすぬけ去つて行つた。(註二)

イエスは故郷の人々に神の恵み給ふ幸福をもた

らざりと楽しみに歸つたが、悲しい思でナザレを立去り、山を越えて湖畔のかペナウムに行き、安息日にそこの教會で人々に教を説いた。(ヨハネ及ルカより)

(註一) イエスは教を説く少し前まで、大工をしてゐたのではないだらうか。この章にもそれを感じるが、過越の祭に、モリヤ山上の祭殿で、繩のむちを振りまはした態度にも、そのことが感じられる。

(註二) この章について聖書は書き足りないのではないかと思ふ。

10

イエスがカペナウムに行つてゐた時のことである。町から湖畔に出ると、町の人々は教を聽かうと四方八方から集つて来た。岸にはシモンとアンドレの舟、ヤコブ、ヨハネ兄弟とその父の舟がつかないであつた。この人々は既にイエスの弟子であつたが、漁師を職業としてゐて、その折も網を洗つてゐた。イエスはシモンとアンドレの舟に乗つて、舟を岸から少し出させて、岸に集つた町の人々に教を説いた。脱ぎ終つて人々を返へした後、イエスはシモンに、「もつと深い方へ乗り出して、網をおろして漁りなさい」と云つた。

「昨夜一晩中網をおろしましたが一匹もとれませんでした。でもお望みならばもう一度網をおろしてみませう」

抑せ通り網をおろすと一ぱい魚がかかり、網が破れざうで、二人では引上げられないので、ヤコ



ブとヨハネを招いて、四人でやつと網をひきあつた。二隻の舟がしづみきりな大漁である。この様を見たペテロは、「これこそ神の業だと驚き、イエスの足もとにひれ伏して、

「イエス様、私は罪深い者勿體なうございます。私をすていらしつて下さい」と云つた。

イエスはペテロやその他の者に、「怖れることはない、お前達は人を漁るものになるのだ」と云つた。その時から、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの四人は漁業をやめて、イエスのお供をすることにしたのだつた。

次の安息日に、イエスは弟子達とユダヤ教に行つて、人々に話を聞かせた。人々はイエスが學者のやうではなく、權威ある者のやうに語るのに(註一)驚き感動した。或る日、イエスが教を説いてみると、惡魔に憑かれた男が教會にはいつて来て(註二)叫んだ。

「ナザレのイエスよ。我等と汝と何のかかはりがあるか。我等をじさうと思つて來られたのか。我は汝が神の聖者であることを知つてゐるぞ」と。

するとイエスはその男に憑いてゐる惡魔に命じた(註三)「黙つてこの人から出て行け」

その男は急にいれんを起して倒れ、身をもがいてゐたが、惡魔がその男から立ち去つて行つた。それを見た人々は驚き怖れて、

「何といふことだらう、權威のある新しい教に何がひない。命令すれば惡魔まで従ふのだからなア」と、口々に云ひあつた。これでイエスの時はガリラヤの四方八方に傳まつた。

イエスはユダヤ教會を出ると、ヤコブとヨハネ

をつれて、すぐシモン・ペテロの家へ行つた。恰度シモンの妻の母が熱病で臥してゐたが、イエスが臥床に近づいて母の手をとつて立たせると、たちどころに熱が退いて元氣になつて、床から起きて客人の給仕をした。

夕方になると、町中の人が病人や惡魔に憑かれた人をイエスの處へつれて来て、シモンの家の門前には市をなす有様であつたが、イエスは一人一人病人に手をふれて癒し、惡魔を呼び出してやつた。(マタイ四章、マルコ一四章、ルカ四章による)

(註一)當時の學者は昔の人の詞を繰り返すのみであつたが、イエスは自己の詞を語つた。それが實は神の詞であつたといふ。

(註二)その頃惡魔はしばしば人に憑いて、その人に住み、その人の口をかりて物を云つたものである。

一一

その夜イエスはシモン・ペテロの家に泊つた。

夜のあけはじめた頃起き出て、寂しい場所ですつてゐた。人々はイエスの妻が見えないので大騒になり、やつと祈つてゐるのを發見して、「おぼせいの人が探してゐます、呵へお歸り下さい」と頼んだ。

「いや、もうカペナウムに逗留はできない。神の國を傳へなければならぬ處が他にもある。私はそのために遣はされたのであるから」と云つて、イエスはガリラヤの村々を巡り、その會堂で教を説き、病人をなほし、惡魔を追い出した。

或る時、旅の途上、一人の癩病患者が訪ねて來

て、イエスの足もとにひざまづいて、

「御心にかなひますれば、私をなほして、この汚れた軀を淨めて下さるでせう」と、懇願した。イエスは、憐れんで、手をさしのべ癩病人に觸れて、

「私の意である、潔まれ」と、云つた。すると、病人は忽ちなほり、すつかり體も縮減になり、普通の人のやうになつた。彼が立ち去らうとするのに、イエスは嚴しくいましめられた。

「決してなほつたことを誰にも語つてはならぬ。ただ祭司のところへ行つてなほつたのを見せて、律法通りに供物をして、なほつた證をたてなさい」と。(註一)

しかし、癩病人は嬉しさのあまりなほつたことを述べたので、人々は病人を助けてもらはうと網集して、イエスは呵へはいることができずに、寂しい處に滞在しなければならぬ始末であつたが、そこへも人々は押し合ひへしあひ集つて來た。

數日後、イエスは住みなれたカペナウムに歸つたが、人々は早速聞きつけて群がり集つて、家のなかも庭のなかも、立錫の餘地がなかつた。暑い季節で庭には日覆の屋根をしてあつた。集まる人々のなかにはパリサイ人(註二)や學者(註三)もつて、イエスの缺點をあげ出しさうと待ち構へてゐた。ところが、イエスが教を説いてみると、庭の日覆の屋根がはぎとられ、そこから四人の男が中風の病人を床にのせたままイエスの前に吊りおろした。イエスに病氣をなほしてもらはうとしたが、人々が多くてイエスの前に行けないので、

(以下五三頁へ)

非常手段をとつたのだ。イエスはこの四人の信仰心を見て、病人に、「お前の罪はゆるさされましたぞ」と云つた。

イエスを敵視する人々はこの詞を聞いて、「不都合のとを云ふ奴だ、神を誹す詞ではないか、人の罪をゆるすのは神以外にできないことだ」と、心のなかで呟いてゐた。イエスはその心を見ぬいて、

「何を心のなかで悪いことを考へてゐるのだ、お前の罪はゆるされたといふのと、起ちて歩めといふのと、どちらが易いことと思ふか。人の子なる私が人の罪をゆるす權威のあることを、お前達に見せてやらう」と云ひ、中風を病む男に、「起き上つて、自分の床をあげて、家へ歸りなさい」と云つた。

すると中風患者は忽ち起き上り、床をあげてそれを肩にかついで群衆の間をおしわけて我家に歸つて行つた。人々は驚き、神をあがめて口々に云つた。

「こんな奇蹟は見たこともなかつた」と。(マタイ八章、ルカ五章)

(つゞく)

(註一) イエスは教を脱ぐために遣はされたので、病人をなほすためではなかつた。しかし、人々は教よりも病氣をなほすことを求めたのであらう。癩者がなほつたと述べたれば、益々病人が集つて、神の詞を傳へる妨げになることを、イエスは怖れたのであらう。

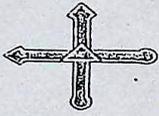
(註二) 碎くない心を持つてゐるのに拘はらず信仰深し風を見せかける者。

(註三) 律法を教へる學者。



化膿症

濕疹・外傷に



Gapecilline

スペインリン

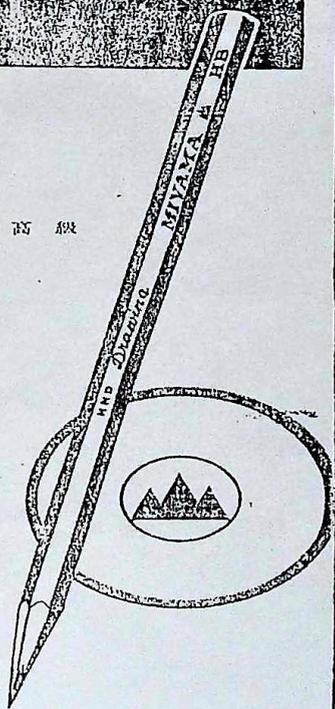
軟膏

ペニシリン型別微生物學的強力殺菌質
本剤は世界的名聲を博せる化膿菌殺菌薬ペニシリンの原質ペニシリン・Gとカビの新発見特殊菌種から苦心創製せる創期的製劑で、ペニシリンと異なり外用により特効が期待される。滲透強散性殺菌作用、其他多角的治療要索の發現による治効の優劣は既に定評がある。特に藥効不變はペニシリン製劑として最も誇るべき特長である。

20元・1000

藥店に品切の時口直接本社へ

三菱鉛筆



最高級



新 約
聖 書 物 語

第 三 回

二二、
イエスは再び過越の祭が近づいたのでエルサレムにのぼつた（ヨハネ五章）祭殿で商賣をしてゐる者共を追ひ出した日から一年目である。エルサレムの祭殿の羊門の畔に、ベテスダといふ池があつた。池のまはりには五つの廊があつて、



その内には、病人や盲人や跛者や不具者がたくさん甦てゐた。時々御使がおりて池の水を動かして波立つことがあるが、その時最先に池にはいる者は、どんな難病でもなほるといふ信仰があつたので、池の波立つのを賤て待つてゐたのだ。（註一）
イエスがエルサレムにのぼる途中、その池の畔を通りすぎたのは安息日であつたが、イエスはそんな不幸な人々のうちに、三十八年間も病氣をしてゐた哀れな男に太

く同情して云つた。
「なほりたいと思ふだらうな」
「なほりたいですが、水が動く時に、私を池に入れてくれる者がありませんし……私がやつとはつて往く頃には、いつも、他の人々が池にはいつてしまふから駄目です」
「起きなさい。床をとりあげて歩いてみなさい」
病人はびつくりして起きてみると、病氣はたちどころ

片 澤 光 治 良
伊 原 宇 三 郎 畫



になほつて、床をとりあげて歩けた。喜んで家へ歸ちりとすると、その様を見て、ユダヤ人達は「安息日に床をとりあげるのには律法にそむくことだ」と、とがめた。病人は「私をなほしてくれた人が、床をとりあげると申しましたから」と答へた。

「安息日に床をとりあげるなんて云つた男は一體誰だ」とユダヤ人達は云つた。しかし病氣をなほしてもらつた男は、それが誰であつたか知らなかつた。イエスはそこに罪業がゐるので何處かへかくれてしまつたから。しかし、暫くたつて、イエスはエルサレムの祭殿でその男に偶然行きあつて、

「よかつたな、病氣がなほつて……二度と卵をおかしてはいかんよ。もつと怖ろしい悪いことが身にぶりがかるからな」と、云つた。この男はユダヤ人のところへ行つて、自分をなほしたのはあの人だと云つてイエスのことを語つた。ユダヤ人達は、安息日に病人をなほすやうな律法にそむいたことをしたと云つて、イエスを責めた。イエスは、

「わが父はいつも悪いことをなさうとお働き下さる、ですもの、私も働くのだ」と、答へた。この言葉を聞いて、ユダヤ人達はイエスをなほすものにしやうといふ上考へた。といふのは、安息日の律法を破つたばかりでなく、神をわが父と呼んで、自分をさも神のやうに信じてゐるからであつた。

過越の祭が終ると、イエスはまたガリラヤ湖畔のカペナウムへ行つた。これも安息日のことであるが、イエスは弟子達と黙した麥畑の中の路を通つてゐた。空腹だつた弟子達は、麥の穂をとつて、それを掌でもんで麥粒を食べた(マタイ二二章、マルコ二章(註))。それを見て、パリサイ人は「なんだ、お前の弟子は安息日に律法を破るやうなことをしてゐるではないか」と、イエスをなぐつた。イエスは答へた。

「昔ダビデが飢えた時、どうしたか、君達は讀んだことがあらう。ダビデは祭司から供物のパンをもらつて、その一部分を自分で食へ、おとももの者共にも分けてやつたではないか、しかも律法では祭司しか食へてはならぬパンをだ。君達の祭司は祭殿で安息日にも働いてゐるが、罪にはならぬと律法に書いてあるではないか。君達に告げやう、ここにあの祭殿よりも偉大な者がある、それは人の子キリストは安息日の主だといふことだ」と。何と不敵な言葉であらう。

そして、イエスはユダヤ教會へ行つたが(マタイ二二章、マルコ三章)、そこに手なへの男が來てゐた。パリサイ人達はイエスを訴へやうと思つて、安息日にその男の手をなほすかどうか、うかがつてゐた。イエスはその心をみやぶつて、哀れな男に、「みんなの前に立ちなさい」と命じた。男は席の上にかつくと起き上つた。するとパリサイ人達はイエスに云つた。

「安息日に人をなほすのはよいことですか」「安息日に麥をなすのと、惡をなすのと、何れが律法にそむくか。君達の羊が安息日に穴におちたら、それを引上げて救はうとしないか。人間は羊よりも尊いものだ。人々のために安息日に麥をなすべきである」

さうイエスは答へたが、パリサイ人達の默然たる様を見て、その殘忍な心を悲し、怒つてあたりを見廻して、その哀れな男に、

「手をのばしてごらん」と云つた。彼は云はれるままに手を延してみると手はなほつてゐた。

パリサイ人達は益々イエスをにくんで、如何にしてイエスをなほすものにしやうかと相談しはじめた。(註)

(註一) 池や泉に浴することで病の治る信仰は在來多い。現在でもフランスのビレーの被の村ルールドでは、

聖者の泉に浴することで難病が全癒するといふことが、カトリック教で公認せられて、歐州各國から特別な病人列車が、特に夏季には、この寒村に集つて來る。

(註二) ユダヤの律法では麥畑の間道通つて、手で採つた麥を歩きながら食へることは差支へないが、家に持ち歸ることはゆるされてゐなかつた。しかし、低劣的なパリサイ人は安息日に麥の穂を採つて手でもんで食へるのには、聖日をけがすものだとして云つてゐた。

(註三) パリサイ人達は、このイエスといふ男の想像を絶するやうな意圖をもはや知らないではゐられなかつた。際限なく被造物から隔てられてゐる「唯一神」が、イスラエル人にとつては如何なるものかといふことを理解しなければならなかつた。それ故、彼等はこの「目清者イエス」の一舉一動について、これを誓約聖書の句や律法の文面に引きくらべてみるといふ方法をとつたのだ。そして、こんな風な安息日出來事をも、吠へたてで、最後の決算日のために一々書きこむのだ。しかし、イエスは自衛するどころか、何といふ大膽さを以て、彼等に挑みかかつたのであらう。これもイエスの意思でなく、神があまりに早く彼のだかに現れたのであらうか。

或る日、イエスはカペナウムから湖畔へ行った。そして湖邊で一人の税吏が小机の前にゐるところで立ちどまつた。税吏といふ彼は、ユダヤ人のうち最も賤しく、最も輕蔑せられて、云はば社會の屑であつた。イエスはその税吏の「マタイ」とも「レウイとも呼ぶ男に近づいて、「我に従へ」と云つた。(マタイ九章、マルコ二章、ルカ五章)

(マタイも、シモンやゼベデオの息子等が一切をすてよといふあの命令を聴かないうちから、キリストの友となつてゐたと同様に、前からイエスを識つてゐたのであらう。通りすがりに、イエスは彼の方を見上げる哀れな犬のやうな眼眸を幾度も見たのであらう。愛にみちてはゐるが、自分では税吏であることを恥ぢて、イエスに話しかけたり、イエスに従つたりできないと思つてゐる氣の腹な願望を、ひしと胸にうけとつたのであらう)

マタイは取税の机から立ち上つて、すぐにイエスに従つた。そればかりではなく、パリサイ人達が驚き、憤り、且つ喜んだことには、イエスの方から嫌はしい税吏に従つて、彼の家で、普通交際せられない税吏や罪人が招かれてゐた食卓に、ついたので。パリサイ人や律法學者は返報をたくらんで、戸口で氣おくれし

た弟子達に嘲つて云つた。

「君達の先生は、なぜ税吏や罪人と席を同じくして食事をすのか」と。

弟子達が答に窮するのを見て、イエスは答のなから叫んだ。

「醫者を要するのは健康な人ではなくて病人だ。君達は往つて、我が好むは憫みなり、犠牲にあらすといふ聖約聖書の句が、どんな意味か研究するがよい。私の來たの



は病人を召ぶためではなくて、罪人を召ぶためである」と。

(このマタイこそ十二人の使徒として、後日マタイ傳を書きのこしたあの聖書マタイである)

その頃イエスは或る夜カペナウムから近い山へのぼつた。群衆や弟子達もそのあとに従つた。しかし、イエスはその人々からはなれて、一人山の頂へのぼり、夜もすがら神に祈つた。夜明になつて、弟子達の待つ山の中腹におりたつて、弟子のりちから十二人を選んで使徒と名

づけた。(マタイ五、六、七章、ルカ五章)それは、弟子達にとり恍惚と戰慄とをともなつた一夜であつたらう。

キリストは感動にふるふる十二人の使徒を伴つて、山を下りて來たが、多くの弟子やエルサレムやツリヤシドンの海邊から集つた群衆に、路をふさがれてしまつた。人々は救を聴かうとし、病氣をなほしてもらはうとし、惡魔を追ひ出してもらはうとして、ひしきまつてゐた。キリストは能力を發揮して、あらゆる病者をなほしたので、群衆はみなイエスに觸れてもらはうともとめた。イエスは目をあげて、弟子達を見て、あの有名な「山上の垂訓」をなした。

イエスはそれまで密かに語るのが常だつた。ところが、この朝は、それを宜へるためにこの地上に來た言を、群衆に傳へはじめた。彼の宜へた言は、聴聞者達がその要點を詩篇のうちどこかに見出さないやうなもの始ど一つもなかつた、豫言者達がキリスト以前に同じやうなことを成かしてゐた。しかし、このナザレ人イエスは、權威ある者のやうに「されど我汝等に告ぐ」と、語つたのだ。新しい語調であり、かりそめの語もはかり知られないほどの強さをもつてゐた。しかも、他のあらゆる人間の場合ならば「光あれ」と、叫んだとしても「我汝等が互に變合はんことを命ず」と宣言するのと等しく、無益に思へるのであらうが、このイエスの場合、この垂訓から、光れと云はれれば、光は地上に満ちあふれ、未知の愛の案が、暴逆なローマ帝國の眞只中に湧き出たのである。神がイエスを通じて語つたのであらうか。

その垂訓はこんな言葉からはじまつてゐる。
 「幸福なるかな、心の貧しき者、天國はその人のものなり」



幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰
められん。

幸福なるかな、柔和なる者、その人は
地を隔がらん。

幸福なるかな、義に飢え渴く者、その
人は飽くことを得ん。

幸福なるかな、憐憫ある者、その人は
憐憫を得ん。

幸福なるかな、心の清き者、その人は
神を見ん。

幸福なるかな、平和ならしむる者、そ
の人は神の子と稱へられん。

幸福なるかな、義のために責められた
る者、天國はその人のものなり、

わがために人、汝等を罵り、また責め、
詐りてさまざまの悪しきことを云ふ時

は、汝等幸福なり。喜び喜べ、天にて汝
等の報は天なり。汝等より前にありし侮

害者等をもかく責めたりき……」

幸福なるかなと、九度叫ばれたこの言
葉からはじまつた垂訓も、群衆が多く

て、この幸福なるかなといふ語しきき
とれなかつた人々は、この福音が幸福の

福音と信じこんだかも知れない。彼等は
さう信じても正しかつたのであらう。カ

ナの奇蹟力りもつと驚くべき變化によ
つて、貧しきは豊かとなり、涙は歡喜

と化したから。地は賑やかな人々ではな
く柔和な人々の有となつたから。しかし、
あらゆる幸福にはそれそれ呪詛がふくま

れてゐる。幸福なるかな心の貧しき人、天國はその人の
ものなり」は、心の解脫し得ない人々は諸國から開放せ
られることを意味してゐる。幸福なるかな心の清き者、
その人は神を見ん」は、心のよごれた人は神を見ること
ができないことを意味してゐる。ところがこの幸福が約
束せられる完徳は、最も人間の天性と矛盾するものに見
える。

體誰か心の貧しい者であるか。

しかし、これ等の幸福が山上から叫ばれたことは、意
味深いことである。そのいかなるものも過ぎ去つたもの
とはならず、一時代から次の時代へ幾人かの人がそれを
心から心へ傳へて行くことで、人間の群が腐敗するのを
防ぐことはできるであらうから。それ故に、その次に、

「汝等は地の鹽なり」と、叫んだのであらう。しか
も、その鹽が效力を失はないやうに、キリストは自分

が人々に與へたこの幸福が、刻々危くされるのを知つて
ゐる故に、鹽の效力を失はないために「純潔」をすく

説いたのであらう。純潔たること。それはこの時代に
は突飛なほどの要求であつた。汝等淫する勿れとは古の

人に云はれしは汝等の開けるところなり。さうだ、これ
は世界的におかされてゐる律法であつたが、キリストは

これに「さうど我は汝等に告ぐ、すべて心情を懐きて女
を見る者は、眞に心のうちを淫したるなり」と、新しい

戒律を加へた。罪はこの語によつて行爲の手に設定せ
られたのだ。鹽は内部に向つて逆洗し、その源に遡る。

この數語は如何なる呪詛にもましてパリサイ人達の義を
無効とさせる。これからは、悲劇は人間の内部に於て、

最も密かな慾望と心の奥底まで忍びこむこの人の子ヤリ
ストとの間に起きるのだ。パリサイ人達の徳は、遊女や

稅吏の悪徳と同様に、もはや外見にすぎない。(私は思
はずこんな風に山上の垂訓を説明しはじめたが、讀者

は自らマタイ傳の五章六章七章に書きつられた長い垂訓
を丁寧によんで、考へる方がよきさうだ。ここに書き寫
すには餘りに長いし、それを要約するのは餘りに美しく
も激しい文章である、フランスの作家ジイドが垂訓につ
いて、自分はキリストが神であるか知らない、しかしこ
んな言葉は神でなければ云へないといふやうなことを、
云つてゐる。神でなければ云へない言葉として、心に
受けとつて讀んだ方がよい。私の説明は、聖書物語とい
ふこの書物からは外れてしまふものだ。

一四、

イエスが山上で人々に與へた内的律法は、その後すば
らしい好結果を收めたらしい。イエスの敵も弱く強さか
つたやうである。カペナツにはローマ軍隊の士官が住ん
でゐた。彼はユダヤ人を愛し、自費でユダヤ人のために會
堂を建ててゐた。彼の愛する僕が病んで死にさうであつ
たり彼はイエスのことをきいて、ユダヤ人の長老達を招
して、僕を助けてくれるやうに頼んだ。長老達はイエス
のもとへ行つて、士官の人となり語つて依頼すると、
イエスも承諾した。イエスが弟子や長老達とその家に
近づくと、彼はイスラエル人の友人達を遣はして、師が
彼の家の園をまなくほど身分不相應なことをするのを思
ひ止まらせやうとして、

「主よ自ら煩はし給ふこと勿れ、そは我不肖にして、主
の我が屋根の下に入り給ふに足らざるなり。故に我身も
御前に詣るに堪はずと思へり。然りながら唯一言にて命
に給へ、然らば、我僕いんん。蓋し我も人の權下に立つ
者ながら、部下に兵卒ありて、ここに往けと云へば往
き、彼に來れと云へば來り、わが僕にこれをなせといへ
ばなすなり」と、云つた。イエスはこれ聞いて感歎し



て、ついで来た人々を顧みて、「積は余イ
スラエルにこれほどの信仰を見たことが
ない」と云ひ、言傳を持つて来た士官の
友人達に向つて云つた。「往け、汝の信
ずることく汝になれ」と。友人達が士官
の家に歸つてみると、僕はずでに全快し
てゐた。(マタイ八章、ルカ七章)

イエスはカペナウを立つて、南の方へ
向ひナインといふ町へ来た。その時は弟
子達と「大なる群衆」もいつしよであつ
た。町の城門にさしかかつた時、衆のた
めに死人をかきいで行く一行にあつた。
死人は御遺子で用は寡婦であつたが、イ
エスは寡婦を見てあはれに思ひ、「なげく
な」と云つて、柩に近づいて手をかけた
ので、柩をがいでゐた人々は不思議が
つて立ちどまつた。イエスは死骸のそば
に立つて、「若者よ、我汝に云ふ、起き
よ」と云つた。すると、死人は起き上
つて目をさきさきしめた。これを見た人々
は怖をいだき神を驚かめて云つた。

「偉大な偉言者が我等のなかにおきた、
神はその民をかへりみ給ふ」と。そし
て、この噂は全ユダヤ國の津々浦々に傳
はつた。(ルカ七章、マタイ八章)

イエスはその旅で「モン」といふパリサ
イ人に招かれて其事したことがある(ル
カ七章)

彼は謹厳ながら抜目のない態度でイエ
スを迎へた。彼はただ好奇心から迎へた

のだと主張できるやうに、潔重一断はりで冷かだつたら
しく、足を洗ふ水も運んで来ない始末であつた。

この町に罪のある一人の女があつた。イエスがシモン
の家に食事の席にゐることを知つて、香油のほいつた石
膏の壺を持つて来て、イエスの足もとに跪ぎつて、泣い
てゐたが、涙がイエスの足にかかつたと思ふと、自分の
髪い髪で手塚にふきとり、香油をぬつて御足に、幾度も
接吻した。(註)

この様を見ても、シモンは心のなかで思つた、この人が
もし神から遣はされた預言者ならば、この女が罪人であ
ることくらゐ分つて、觸らせることをしないで、あらうに
と。ところが、イエスはシモンの心を見ぬいて云つた。
「シモン、私は話したいことがあるが」
「どうぞ仰つて下さい」

「二人の人が或る金貨から金をかりた。一人はデナリ五
角、一人は五十負借してゐたが、二人とも返給できな
いので、金貸は二人を負せてやつた。この二人のうち、ど
ちが貸主を有難く思ふだらうな」
「もちろんたくさん免じてもらつた方ぞございませう」
「仰有るとはりだ」と云つて、イエスは女の方を振り向
きながらシモンに云つた。

「この女を見なさい。私がこの家にはいつたのに、お前
は私に足の水を與へず、この女は涙で私の足をぬらし黒
髪を拭つた。お前は私に接吻もしないが、この女は、私
が来た時から私の足に接吻してやまない。お前は私の頭
に油をぬらないが、この女は私の足に香油をぬつた。そ
れ故、私はお前に告げる、この女の多くの罪はゆるされ
たと。多く愛したからだ。赦される事の少ない者は、愛す
ること少い」と。そして女に向つて云つた。

「お前の罪はゆるされた」と。

すると兵卒をともにした人々は心の中で云つた、まる
で神のやうに人の罪を許すなんて云ふこの人は一體誰で
あらうかと。するとイエスは女に向つて、
「お前の信仰がお前を救つたのだ、安心して往くがよ
い」と云つた。(註)

(註一) マタイ傳とマルコ傳では、この香料と美しい
髪と涙にぬれた顔を持つた女は、受難の前日に、マタニ
ヤに住んでゐる掃蕪者といはれた他のシモンの家に登場
してゐる。ヨハネ傳ではこの女をマリヤと名づけてゐ
る。或る者は彼女が、イエスがその身から七悪鬼をおひ
出したマクダレナ・マリヤだと信じ、ある者は蘇れる者
ラザルとマルタとの妹だと信じてゐる。これは實際どう
でもいふことであらう。この女がいつも彼等の前におら
はれたので、その行路についての物語にいろいろの變化
が生じたのであらう。

(註二) この女は多く愛したからだ。といふ言葉
は、もちろんキリストを多く愛したといふことであら
う。しかしこの言葉は、最も痛ましい愛情のうたひ、自
己忘却と犠牲と苦痛とがありうるといふ意味によつて損が
るのではなからうか。一ケの存在が他の一ケの存在へ無
我夢中になつて信従することには、神もどうしやうもな
いといふのであらう。ところが、華で中風病もきいたこ
とのある、イエスが目にする詞のうちで最も甘しからぬ
詞が(そのうちにはつきり神が顯はれて奇みがないので
あるが)豫けのた、お前の罪はゆるされた」と。ユダヤ
人達はもう奇蹟には驚かなくなつた。イエスが皮膚を行つて
みせたので、憎れつこともなつてをり、譯が分らないか
ら、トリツクがあるのだと、悪業がついてゐて行ふの
だとか云つて、一應説明をつけてゐるのだが、この簡單
な詞は、どんな不可思議よりもユダヤ人達を困惑させた。
た。實際現物が新たに生れることに比べ、それだけ彼が蘇る
ことなどいふ易いことかも知れない。



新約
聖書物語

第四回

一五

イエスはガリラヤの南部を旅して、カペナウムに歸り、或る日湖畔で、自分の放つた人々ととりかこまれながら、福音の眞理を語つた。(マタイ一三章、マルコ四章)あの山上ではペリサイ人達を正面攻撃して堂々と語つたが、ここではやはらかに子供等に話すやうに、たとへに眞理をつつんで物語つた。



人々はそのたとへによつて神の眞理を知らなければならぬが、弟子達は拗くそのたとへ、の理山をイエスに問ふた。イエスは身をひくめ地に坐り最も小さい者と同じレバルになつて、その人々のよく知つてゐる、種播き、麥刈の莠麥ペンダネ、芥種などの話をした。

例へば種播きのたとへでは、イエスは次のやうに話した。
「視上、種を播く者があるが、路端におちて、

鳥に啄ばれる種がある、土のうすい石地におちて萌え出たが枯れる種もある、茨の地におちて成長できぬ種もある、良き地におちて百倍も六十倍も實を結ぶ種もある、耳ある者は聴くがよい。」

弟子達が後でその意味を訊くとイエスは答へた。

「お前達は天國の奧義を知るをゆるされてゐるが、彼等はゆるされてゐない。彼等は眼はあ

芹澤光治良
伊原宇三郎畫



ど見ず、耳をもでど聞かず、心あれど悟らないからである。しかし、お前達の眼、お前達の耳は、見る故に、聞く故に幸である。種播く者のたとへを聴くがよい。誰でも天國の言をきいて悟らぬ時は、思しき者來たりて、その心に播かれたものを奪ふ。路端に播かれたとは、このやうな者である。石地に播かれたとは、御言をきいて、直に喜び受けても、己に根がなければ、折く耐へるばかりで、御言のために艱難や迫害のをきる時には、直につまづく者である。天の中に播かれたとは、御言をきいても、世のことを思ひ煩ひ財寶に心を寄せ、御言を生かすことのできない者である。良い地に播かれたとは御言をきいて悟り、實を結んで百倍にも六十倍にもなる者である」と。

こんな風にイエスは眞理を、學者達に分らないやうに單純な小話につづんだ。己の教を包んでイメーヂの灰をかぶせたのであらう。それは餘りに早く死にわたされることを用心したからでもあらうが、又、弟子達や十二の使徒達をも奪かなければならなかつたからであらう。といふのは、イエスの死の前日までセベデオの子等が王座を望むほど(マタイ二〇章)弟子達はイエスが現世的な勝利を得るものと堅く信じていたので、イエスは根氣よく彼等に神の國が自然に成長し、時御つて實る補だと説いたのであらう。それ故に、芥種のと、へを持ち出して、「天國は一粒の芥種の如し、一人これを畑に播け

ば、萬の種のうち最も小さいが、育ちては他の野菜よりも大きく、畑となつて空の鳥も來たりて枝に宿るほどである」と、さとした。

そして、弟子達を最も痛ましい眞理に備へさせるために蒔麥のたとへを説いたのであらう。天國にはもう一人、主の畑に蒔麥を播く人がゐる、そして人々には收穫の時まで蒔麥と麥との證別ができない。その時が來れば蒔麥は燒かれるだらうが、しかし種は既に敵におたされてゐるのだと。そればかりではない、神の國は、またパン粉に混ぜた少量のパン種(ふくらし粉)であるたとへた。繼ての人間の粉が、恩寵でふくれ上るだらうと説いたので。また、天國は畑にかくされた寶だとも、尊い眞珠を求めぬ商人のやうだともたとへて、弟子達の望んだやうに現世的な精々たる勝利をささめることではなくて、世の中にかくれた寶でなければならぬことを掘く教へたのだつた。

一六

イエスはガリラヤ湖畔で教を説いてゐたが、人々がおしかけて來て、その夜は眠ることもできなかつたので、「彼方へ往かう」と、舟を乗り出した。弟子達も多く、他の舟も従つた。イエスは艫の方で寝てしまつたが、急に烈しい颯風がおこり、大浪がおきて今にも舟はてんぶくしきりになつた。弟子達は狼狽して、大聲でイエスをおこして、「師よ、我等亡ぶ」と叫んだが、

イエスは起き上り海に向つて「黙れ、しづまれ」と叫んだ。すると風はやんで大風となつた。(マタイ八章、マルコ五章、ルカ八章)

弟子達はイエスが愛であるとして信頼して子供のやうになつてゐたのだが、船の上に髪を風に亂して突立つたイエスを、ふるへながら眺めて見覚えのない人のやうな恐怖を感じた。風と海に命じて、その詞に従はせるとは、一體「これは何人ぞ」と、互にぶつたが、しかし、イエスは「何故に怖くするが、信仰する者よ」と弟子達に怒つた。註この語調こそ、弟子達の知るイエスであつたらう。

船は聲無事東岸のガダラに到着した。イエスが上陸しやうとすると、破れた甕に憑かれた男が、墓場から走り出て來た。彼は足枷と鍵でつながれてゐたが、鍵をちぎり、足枷をくだいて誰も制することができなかつた。夜も昔も、墓場や山中で叫びつづけ、自分の罪を石で傷つけてゐた。彼は遠方からイエスの來るのを望見して、走つて來てイエスの前に平伏した。イエスは「破れた甕よ、この人より出て住け」と云ふと、彼は大聲で、「いと高き神の子イエスよ、わたしとあなたとどんなかはりがあります。どうぞお願ひします、わたしを苦しめないで下さい」と、叫んだ。

「お前の名は何と云ふか」
「わたしの名は軍隊と云ふ、仲間が多いからで



す」と答へて、悪鬼をこの地の外におひ出さないやりに切望した。湖畔に近い山一面に豚が群がって物を食べてゐた。悪鬼はイエスに云つた。「わたし等がこの男から出なければならぬ。ならば、豚の群のなかに入れさせて下さい」

イエスがゆるすと、悪鬼はその男から出て豚の群にはいつたので、二千匹ばかりの豚は狂つて池から海に向つて駆けおりて溺れてしまつた。豚の見ほりをしてゐた人々は逃げて行つて、町や里へ騒ぎ立てたので、何事が起きたのかと、邊の住民がイエスの處へ集つて來たが、悪鬼につかれてゐた男が衣服を捨て普通人になつて坐つてゐるのを見て、仰天した。そして、その男と豚の上へ起きた事柄を知ると、恐怖心から、イエスにその地を去るやりに求めた。百姓である彼等には自分の魂より自分の豚の方が大事であつた。しかし、恐怖は俯仰の秘步形式である。イエスはそのためであらう、舟に乗つて去らうとすると思鬼を拂はれた男が、一緒に伴はんことを願つた時、ゆるさないで、

「なんぢの家に、親しき者に歸りて、主がいかに大なる事を汝になし、いかに汝をあはれみ給ひしかを告げよ」と、命じた。(註二)

(註一)この怒はどんな意味であらうか。私は色々考へて人間のあはれさを自分の心に見出すのだが。

(註二)この哀れな民衆に神の國のことを宣べ教へるやうに命じられこの男は、タルソのバ

ウロの先驅者になつたのだ。

一七

そこでイエスは悲しげに(註一)舟に乗つて引返した。そして湖の向岸に上陸したのだが、その時如何に大きな歡喜をもつた、熱狂した親しい群衆がイエスを迎へたことであらう。彼等はイエスを恐れるどころか、イエスにつめかけ道をふさいで歩くこともできなかつた。その時會堂の司であるヤイロなる者が來たので、人々はやつと道を開けたが、ヤイロはイエスの足下にひれ伏して、

「私の稚ない娘が死にかけてゐます。お出になつてお手をあてて下さい。さうすればきつと治りますから」と、懇願した。イエスはヤイロの家へ行かりとするが、またも群衆がとりかこんで身動きができない。

その雜沓のなかを歩みながら、イエスは「能力の己より出でたるを自ら知り(マルコ五章)群衆のなかで振返り、誰がわか衣に觸れし」と云つた。弟子のペテロは「群衆がおしせまるに、なほ誰か我に觸れしと云ふか」と笑つたが

イエスは鐵籠の己の肉體から出たのを知つて、觸れた者を見上りと見廻した。すると一人の女がふるへながらイエスの前にひれ伏した。

この女は十二年間血漏を病んでゐて、醫療のために財産をつかひ果してしまつたが、イエスのことを聞いてやつと群衆のなかをかきわけて

イエスの後から「御衣にさへ觸れれば助かるだらう」と思つて、衣にふれるとたちどころに病氣はなほつたのだつた。イエスは彼女を見て云つた。

「なんぢの信仰なんぢを救へり、安かに住け」その時、會堂司の家から人々が馳せつけて、「娘は死んだので師を煩はずには及ばぬ」と、ヤイロに傳へた。その言葉をイエスは傍で聞いてヤイロに云つた。

「ヤイロよ、懼れるな、ただ信ぜよ」

恐怖ではない信仰だ。信ずる者は救はれるのだ、ただ神を信ずることは神の賜物であり、救ひにとつて必須である。民衆はイエスを恐れもせず、前に進ませもせず、我勝ちにとイエスの衣服のふさに觸れやうとした。この日は恐らく愛情と數々の驚異の日であつたらう。イエスは會堂司の家へいそいだ。ヤイロと妻はイエスを家に招じた。ペテロ、ヤコブ、ヨハネを除いて誰も入ることを許さなかつた。人々は幼女の死を悲しんで歎いてゐた。そして萬事休してからやつて來た愉快な人を嘲笑する者もあつた。しかしイエスは云つた。

「どうして強いだり歎いたりするか、幼児は死したるにあらず、いねたるなり」

イエスは人々を外に出し、幼児の両親と三人の弟子とを伴つて、死せる幼児に近づき、幼児の手をとつて、

「少女よ起きよ」と云つた。少女は立つて歩か



出した。その時少女は十二歳であつた。イエスは娘に食物を興へるやりに命じた。

それから、イエスはまたガリラヤの村々に出て、會堂で教を説き、病人をなほした。そして十二人の弟子を召して、二人づつ組ませて、傳道のために送り出した。弟子達に病をなほす力を興へ、悪鬼をおひ出す力を授け、杖の他には何も持たず、食糧と袋も帶のなかに錢も持たずただ草鞋ばかりをはき、二つの下衣をも着ないやうに、完全な清貧を守ることを命じて、云つた。

「イスラエルの家の迷へる羊のところへ行け。行つて天國の近きに在るを説き、癩病を治し、死人を甦らせ、悪鬼を追ひ出せ。假なしに受けられれば假なしに興へよ。金を携へず、各地の善い人に求めてその人の家に泊れ。若し人が汝の詞をきかずば、その家、その町を出づる時、靴のために草鞋のほこりを拂へ。汝等の詞に耳傾ける人は私に耳を傾け、私に耳傾ける人は私をこの世に遣はし給ふた者に耳を傾けるのだ」

十二人の弟子達は二人づつ別れてガリラヤの町々に出かけて、教を説いて、まはつた。

(註一)イエスはいつも崇拜か憎惡かを受けてゐたが、ガダラでは初めて恐怖をもつて迎へられたことで悲しんだ。ガダラ人はイエスに彼等から遠ざかつてくれるやうにと願つたからした恐怖から無關心な態度をとられたのはイエスは初めてであつた。これは彼等が非常に多くの

後裔を持つことを、イエスに示しはしなかつたか。お召を受け、目で見、手で觸れて、眞理が活きてゐることを悟る人々が、己の職業や食慾にしばられて、各自の「豚の群」を相手にしなければならぬ姿を、イエスはガダラで見はしなかつたか。



一八

洗禮者ヨハネがヘロデ、アンテパス王から投獄せられて一年にもなり、今は死海近くの獄屋になつてゐるが、弟子も少くなつた。この弟子達はイエスの評判に動搖したのだが、獄舎の奥でヨハネ自身も動搖したのであらうか、二人の弟子をつかはしてキリストに問はせた。

「来るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか」と。(マタイ十一章)

(自分は思ひちがひしてゐたのか、あの耳にした聲が天の際ではなかつたか、あのイエスは自分自身のことを何と云つてゐるか——さうヨハネは疑つたのであらうか。この二人の使者は先驅者が神の業に課した一の試験であつたらう)

イエスは二人の使者の目の前で多くの奇蹟を行つて、二人に云つた。

「往きて汝等の見聞せしことをヨハネに告げよ。盲人は見、跛者は歩み、癩者は潔められ、聾者は聞き、死人は甦へられ、貧しき者は福音を聞かせらる。總て我に置かぬ者は幸福なり」

使者が去つた後に、イエスは洗禮者ヨハネのことを、豫言者中の最大の神學家として語つた。この先驅者は天國に歸するものでないからであらう。「神の國にて最も小さき者も洗禮者ヨハネより大なり……」思へばこの落葉した大樹のやうなヨハネは、荒野の真中にただ一本ぎりたつてゐる。その根は舊約の律法におき、その最上の梢は、彼のことを愛をもつて語るキリストに、やつと届くか届かぬであらう。しかし、彼等は互に見合ひ、認めあひながら、あたかも時空の外にへだてられたやうに、二つの心に完全な溶解は起きなかつた。そして、間もなく洗禮者ヨハネは一生を終つた。ヘロデ王の誕生日にあたり、大饗宴がひらかれて、王子や貴



族が宮廷に集つてゐる席上に、王の妻ヘロデアの娘サロメを呼んで、舞踏を演じさせた。ヘロデアは喜び、

「欲しいものは何でも裏衣につかはす。思ふものを云へ、望みならばこの國の半分でもやる」と誓つた。これこそ肉の無上の悦びであり、生きると呼ばれることの象徴であらうが、同じ夜ここから遠くからぬ淋しい場所に、神の子と呼ぶ一人の男が祈るために引こもつてゐたことを思ふのも面白い。

小娘は母に「我何を求むべきか」と訊ねた。「ヘロデアは「洗禮者の頭を」と答へた。サロメは驚きもせず氣にもかけずに、王にさう云つた。

王は悲しんだが、誓つた手前もあり、列席した者への見栄もあつて、獄吏を擲にやりヨハネの首を斬り、その首を盆にのせて來させて、少女に與へた。少女はこれを母に捧げた。

その後、ヘロデアはイエスがさまざまな奇蹟を行ふ話を聞いて、「わが敵りし洗禮者ヨハネ、死者の中より復活したり」と、畏れた。（これを察するに洗禮者はヘロデアにキリストのことを話さなかつたのであらう、それは、地上に於て自分がその先に立つて進んだこの人が何者であるかを知つて、つひに悦びを味つたからであらう。）

十二人の使徒はガリラヤ地方の村々を説教し

一九

て歩いてから、湖畔でイエスを待たつた。彼等はイエスの名によつて行つたことに驚てゐる。一同は榮しく陶然となつてゐたが疲れてゐた。多くの人々がつきまとつて、休む暇も食事をとる暇もなかつた。イエスは弟子達をあはれんで「汝ら人をさげ寂しき處にいざ來り暫くいこへ」と、云つた。

しかしイエスの行く荒野はすく人でりづまるので、ベテロとゼマデオの舟以外には人々からはなれて靜かな場所はなかつた。それでイエスは弟子達と舟のつて岸をはなれた。しかし民衆はイエスにつきまとい、イエスの隠れ場を感づいて、岸づたひに舟を追つて、イエスがペラサイダの町近くへ上陸した時には、岸で待ちうけて迎へた。それに加へて附近の町々の人々まで集つてゐた。イエスも使徒もへとへとに疲れてはゐたが、群衆は心から信じてイエスの方を見上げてゐた。それを見て、人間的な感情——憐憫が彼の胸を波立たせた。この憐憫こそは造物主にも被造物にも共通する感情であらう。イエスは疲れも忘れて、多くのことを教へた。（マルコ六章）しかし、キリストが疲と飢とを忘れて、民衆をあはれんで語つたといふ内容は、福音書の著者は誰も傳へてゐないが、恐らく筆では表現できないからとてやめてしまつたのであらう。或は疲勞のために記憶できなかつたのであらうか。無數の老若男女はイエスにみ

の野面におりたのも氣付かなかつた。すつかりおそくなつたので、弟子がイエスのところへ來て、説教を遮つて、

「ここは寂しい處ですし、はや時暮れし、人々をかへして、附近の里か村へ行つて、銘々食物を買はせたら」と、注意した。

「汝等食物を與へよ」と、多少怒氣をふくんだ調子で、イエスは弟子に答へた。

「私共が行つて二百デナリのパンを買つて、みんなに食べきせるのですか」

「パンがいくつあるか、佳つて見よ」

かう弟子と語るイエスには、パンにのみこたはる弟子に對する失望感があつたらう。

「そこに五つのパンと二匹の魚を持つてゐる男の兒がゐますが、この大人數では何のたしにもなりません」と、弟子は云つた。

イエスは五千人の人を草の上に坐らせた。

「イエス天を仰ぎて祝しパンをさき、弟子達にわたして人々の前におかしめ、二つの魚をも人毎に分ち給ふ」（マルコ六章）それでも、残つたパンの屑が十二の筐に一杯あつた。

満腹した群衆はそのパンと魚の由來を知つてすつかりイエスの味方となり、イエスを國王たらしめやうとした。ここで、あのユダの落んだことを思ひ出すのも面白い。しかし、イエスの頭つてゐた王國は人々の欲するやうな現世的なものではなかつた。イエスは弟子達を無理にせかせて舟にのせカペナウムの方へ漕ぎ出させ、



獨り山にのぼつてしまつた。

イエスとしては、恐らく自分が表象として行ひ、これ等の哀れな人々にはとても想ひもつかなかつたことのために、心がさばいで獨りになりたかつたのであらう。云ひかへれば、己の體たるべきこのパン、己の血たるべきこの酒の、想像も及ばぬ増加を、もしこの時でなかつたら幾時告げることができるか、もう生きながらべき日はいくばくもないのだから。

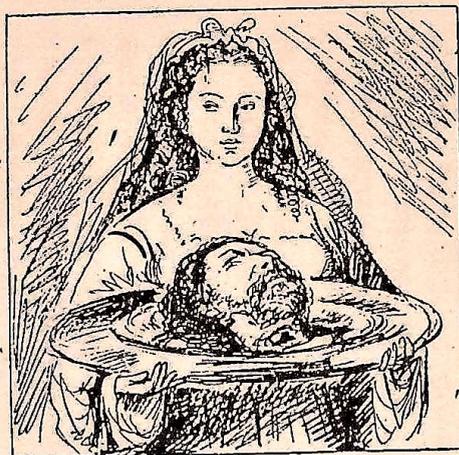
とつぶり夜になつて、大風が起きた。その風は哀むべき民衆の踏んだ草の香を山上に運んだイエスは風にさらつて湖を漕いで行く弟子達の困難を思つた。そして彼等のところへ行かうと、一番近い路をとつて湖上を歩いて行つた。

イエスはすばやい足取りで、波立つ水上を進んで行つた。イエスが遠くから、風にさらつて漕ぎ憫んでゐる弟子達を見かけたのだから月が出てゐたのであらう。マルコは「行きすぎんどし給ふ」と書いてゐる。彼等が櫂をすて、不安ほ立ち上るのを見て、「心安かれ、我なり、怖るな」と、遠くから叫んで、舟に追ひついて飛びのると、風がしづまり、海も風ぎわたつた。弟子達は心の中で驚いてしまつたが、マルコは「彼等は生のパンの事をさうとらず、反つてその心鈍くなりしなり」と誌してゐる。

夜のうちにただ弟子達ばかりが見たこの不可思議は、すぐ見破られた。といふのは、あの民衆は、使徒達がその師を伴はずに舟に乗るのを

見たうへで、岸傳ひにカペナウムに引返したのに、イエスがその舟に乗つてカペナウムに來たので、愕然とした。そこで四方八方から「師よ何時此處へ來り給ひしぞ」と、質問責めにした。

イエスが荒野で食物を興へたから、なほ少しも費用のかららないパンをもらへると思つて彼等はイエスを追ひまはすのだ。彼等は再びバ



ンを授けらうと、待ちきれないほどの悦を抱いてゐた。それ故、イエスも彼等に向つて、パンではないほんたりのパンのことを話さうと決心しなければならなかつた。これは憐憫からであらうか。

「……なごなる糧のためではなく、永遠の生命にまで至る糧のために働け、人の子が汝等に興

べんとする糧のために働くがよい」(ヨハネ一章)

イエスが彼等を伴つて行つたカペナウムの會堂の中には、前夜食物を授かつた心替しい人々のうちに、敵誼も既にまちつてゐたので、邪悪な聲が起つた。

「私共が神の業を行はうとするにはどうしたらよいでせうか」

「神の業を行ふには、その遣し給へる者を信することである」

「では私共があなたを信するやうな證據に、何をなし、何を行ふことができますか。ほんたりの奇蹟は荒野に降りそそいだマンナである。あなたもパンをふやしたほどの人なら、それくらゐのこゝろをして見せろ、我等が先祖は荒野でマンナを食へり」

「誠に汝等に告げる、モーゼは天よりのパンを汝等に興へたのではない。我父こそ世に生命を興へる天よりの眞のパンを興へ給ふのである」すると彼等が「主よ、そのパンを常に我等に興へよ」と、云つたので、イエスは答へた。

「私は生命のパンだ。私に來る者は餓えず、私を信する者はいつまでも渴ぐまい……が天より降りたのは、我が意をなさうといふのではなく私を遣した者の御意をなさうためである……」

イエスは進みすぎたのだ。パリサイ人達の罵聲が弟子達のうちにまで傳はつた。これは大工の子イエスぢやないか、私共はその兩親を知つ



てゐる。それなのに、天より降つたなど云つてゐる」と非難の吐きが彼の話を遮るが、イエスは愛を傾けて彼等に掛みかかつた。

「汝等嘆き合ふな、私を遣はし給ふた父が引き給はずば、誰も私に來ることができない。私に來る人は、私は終の日に復活させよう……誠に汝等に告げる。私を信する人は永遠の生命をもつのである。私は生命のパンだ。汝等の先祖は荒野でマンナを食べたが死にじた。天より降るパンは、食へる者を死なせない。私は天より降りた活きたパンである。人もしこのパンを食へば永遠に生きるであらう、そして私が與へんとするパンは、この世を活かすための私が肉なのだ。」

（ここに於てユダヤ人がひに争ひて云ふ、この人はいかで己が肉を我等に與へて食はしむることを得んと、ヨハネは答いてゐる）どつと笑ひ聲も起きたであらう。しかし、イエスは總てを見ないかのやうに、愚かしいやうな眞理をくりひらげた。

「もし汝等人の子の肉を食はず、その血を飲まねば、我に生命をもたぬのだ。我が肉を食へ我が血を飲む者は永遠の生命をもち、私は終の日に復活させよう。我が肉は眞の食物であり、我が血は眞の飲物であるからだ。我が肉を食へ、我が血を飲む者は、私の裡に在り、私も亦彼の裡に在る。活ける父が私を遣はし、私が父によつて活きてゐるやうに、私を食ふ者も亦私によ

つて活きよう、これは天より降つたパンだ、汝等の先祖がマンナを食べても死んだやうではなくこのパンを食へる者は永遠に活るであらう。」

福音書はここに加へてゐる「イエス、カペナウムなる會堂の内に於て教へつかく云ひしに、弟子達の中にはこれを聞き、この説は難し、誰か之に聽くことを得んと、云ふ者多かりき」と。そこでその時までイエスに従つてゐた多くの者が退いたのだ。しかし、あのイスカリオテのユダはイエスに裏切られた憤怒をかくして、退く群に加はらなかつた。然ら、ユダはその瞬間、イエスの考を占めてゐたのだらう。聖ヨハネはこの時書いてゐる「イエスは賣るべき人の誰なるかを知り給へり」と。

群衆は嘆きながら散つて行く。イエスは最早人々をさけるために荒野を探る要もない。舟に乗るにも及ばない。イエスは進みすぎたのだ。人々は彼について來れなくて地放し初めた。潮暗い會堂には、度々失なつて、何と言葉をかけたいか窮してゐる十二人の男しか残つてゐなかつた。イエスは彼等を一人一つ眺めた。そして突然あまりに優しく又あまりに痛ましい問が發せられた。

「汝等も去らうと思ふか」
するとシモン・ペテロが一同を代表して叫んだ。
「主よ私達は誰の處へ行きませうぞ。貴方こそ永遠の生命の言を有し給ふのです。又私達は世

方を信じ、よく識つてゐます、貴方は神の聖者です」

見棄てられた人を慰める筈のこの叫に、最初は何の題もない。十二の顔が悲痛なイエスの顔に向いた。しかし十一人の上に輝いてゐる光を發らせるのには、彼等のうちの一人だけで足りる。イエスはついに云つた。

「我汝等十二人を選びしにあらざるや」そして切ない聲で云ひそへた「しかるに汝等の一人は悪魔なり」と。

イスカリオテのユダを指したのである。彼は十二人の弟子の一人であるが、イエスを賣らうとする者である。

(つづく)

次 號 豫 告

アメリカの小住宅 柳瀬 駿
ポッティエチエリリ 摩壽意善郎
魅力

☆ 特 輯

西洋 古代劇 新關 良三
日本演劇の史的展望 河竹 繁俊
近代劇から現代劇へ 菅原 卓

☆ 創 作

望 (第五回) 林 芙美子
假 寓 佐多 稻子

聖書物語 (第五回) 芹澤光治良
座談會・冬のスタイル・記事補載

新約
聖書物語

第五回

二十

イエスは彼をなきものにしよりと謀略してゐる人人を避けるとともに、十二人の心定まらぬ弟子達と孤獨な時を惜しみ、その精神を練るためであらうか、彼等を伴なつて流浪の旅に上つた。イエスは一年以内に、世界に道を宣へ擲めに出る弟子達と別れなければならぬことを知つてゐたし、彼等に教へなければならぬ大事なことが多かつた。特に彼等の信仰をはつきり



満めておかなければならない。

彼等はまだまだぐらくら逡巡し躊躇してゐた。或る時はイエスに眩惑せられ、確信に満ちて、お互に「こは實に神の子なり」と云ひ合つたが、イエスを非難する者があれば、動搖して、その非難がまんざら無故でもないやうに考へたりする状態であつた。それ故、イエスは彼等の想像する冠と王座とが、決して現世的なものではなく、それどころか、茨の冠と赤い上衣とあの二片の木片を見て失神しないために、彼等をみづちり

しこんでおく必要があつた。

イエスと十二人の弟子はカペナウを出て、ガリラヤを断切り、地中海近いシロとシドン地方にまで達し、再びデカポリスの方へおりた。その旅の間、イエスは弟子達に福音をうまずに語つた。神の國はわれわれの裡にあるのだといふこと、人間を汚すものは外から來るのでなく、人間が自己自身の穢れの製造者であることを、繰り返へし説いた。その旅の間も、病者が救ひを求めれば、助けることを拒まなかつた。例へば、屈

芹澤光治良
伊原宇三郎畫

「悪き女の母が救いを求めると、異邦人であるからとて弟子達が冷かに扱ふのに、「汝の信仰は大なるかな、願のごとくなれ」と云つて助け（マタイ十五章）

「悪者聖者には、指せきの耳に入れ、唾してその舌に觸れて助け、ベツサイムでも一人の盲人の目に唾をつけて助けた。この盲人の喜んだ驚きの機が聖賢に「われ人々の歩むを見るに、樹の如くなり」と話してある。

その旅でも行く先々に、人々が集つて来たが、イエスはユダヤ人の心を刺戟することをさけて、病人を助けるのにも群集からはなれた處へつれて行つたり、助がつたことを誰にも告げると必ず注意した。デカポリスでは皆てガリラヤであつたやうに、女子供を除いて四千人の男がイエスを見、その教を聞かうと集つて三日も食事のことを忘れてゐた。町の遠い荒野のこととて、持ち合はせた七箇のパンと少量の魚とで、イエスはこの群衆を満足させ歸させた

イエスは群集からはなれたかつたのであらうか、ガリラヤ湖畔のベツサイムから、すつと北方の彼の名を知らない地方、ヘルモン山の麓の方へ行き、カイザリヤ・ペリゴに宿した。イエスは十二の使徒をつれて旅に出た時から考へてゐた質問を、ついに彼等にしてみようと決心した。イエスがカナナムを去つて異邦人の中に旅を企てたのも、世は彼等をこの試みにあはせるためだつたらう。カイザリヤの町からはなれた所で思ひ切つて訊ねた「人々は我を誰と云ふか」と。弟子達は隠して目を見交はして、

「洗禮者ヨハネ、或る人はエリヤ、或る人は預言者の一人と云ふ」と答へた。

「汝等がわれを誰と云ふか」

「一瞬使徒達はためらつたが、シモン・ペテロが叫んだ「キリスト、活ける神の子なり」と。

「シモンよ、汝は幸福なるかな。それを汝に示したるは血肉ではなくて、天に在す我が父なればなり。我も汝に告げる。汝はペテロなり。我この磐の上に我が教會を建てん、黄泉の門もこれに勝たざるべし。我天國の鍵を汝に與へん、凡て汝が地縛く所は天でも縛き、地にて解くものは天にても解かれん」（マタイ十六章）と、イエスは答へたが、すぐに弟子達を戒めて、己がキリストであることを誰にも告げると注意した。

しかし、イエスはその時まで巡遊してゐたあの豫言を、ついに口外すべき制限が来たといふ決意をした。

十二の使徒はなほ信仰湧き者ではあるが、イエスをキリストだと信じてゐるのであるから、告げてもよからうと考へたのであらう。そして、イエスは慎重に語りはじめた。一體何を語つたか。イエスはこれを最後にエルサレムに上るのであらう、長老、祭司長、學者から苦しめられ、死に付せられるだらう、しかし三日後に蘇るであらう——と、全く彼等の豫期もしない驚くべきことだつた。

「さう語つてイエスは歎したが、唯一人その沈黙を破る者はなかつた。恐らくイエスは弟子達の心を一つ一つ馴らしたであらう、そしてカイザリアの方へ打ちつれて歸つたのであらう。ところが、弟子達のうちで最上位にあつて、イエスをキリストであると宣言したペテロが、皆から離れてイエスを傍に招いて悲しい聲で云つた。

「主よ、そんなことはしないでせう、御身にそんなことは起さないでせう」

イエスは振り返り怒つて叫んだ。

「悪魔よ退け。汝は私を踏かさうとする。汝は神のことを思はず、人間のことを思つてゐる」

ペテロはうなだれて引退つたが、しかし、ペテロにどんな考が抱けたであらう。イエスが彼のやうに人間だつたにしろ、彼はイエスのやうに「神の社」でなかつたから。その時、イエスは十二人の使徒を勞つてやらうとしたのであらうか。

「人もし我に従ひ来たらんと思はば、己をすて、己が十字架を負ひて我に従へ。己が生命を救はんと思ふ者は、之を得べし。人は全世界をもち得るとも、己が生命を損せば、何の益あらん、又その生命の代に何を與へんや……」

恐らくその時イエスはあのイスカリオテのユダを監視してゐたのではなからうか。ユダは考へてゐた「一たび全世界をもち得れば、いつだつてその生命を救へるではないか。第一全世界を失つてから生命をもち得るとて、何の益になるか」と。

二十一

イエスは多くの弟子のうち十二人を選んだが、なほ多いと思はれたのか、六日間の黙想の後、三人を選んだ。マテロ、ヨハネ、ヤコブの三人を。イエスはこの三人をつれてヘルモン山に上つた。恐らく不日最晩の弟子が「生命の御言葉につきて、我等が目にて見し所

手にて抜ひし所、耳にて聞きし所」(ヨハネ一章を引
き得るやうに、輝かしい姿を現はして、己が神の子で
あることを信じさせ、無理にも認めさせたのであらう
か。

イエスが三人の友をつれてヘルモン山に上ると、陽
のやりに輝いたその顔は空を暗くし、雪の如く光つた
その衣服は遊りの世界を闇にしつめた。粗末な衣服を
つけた一人の貧しい人間が光を發したのだ。それとこ
ろではなく、モーゼとエリヤとがあらはれて、イエス
と語つたのだ。昔て湖上を歩いて船に近づいたイエス
を見て恐怖におののいた三人も、この様を見て何等恐
れなかつたらしい。神業を行ふ人は恐怖を興へるが、
神が顯れば自然に崇め愛させるのであらう。三人の
弟子は心に信仰の熱するのを感じて、「三人とも同じや
うなことを云ふ。主よ、我等の此處に在るはよし」
十日既にくれんとすれば、我等とともに留まり給へ」
と、御意ならば我ここに三つのはりを造り、一つを
主のため、一つをモーゼのため、一つをエリヤのため
にせん」だ。ペテロが最後の言葉を云ひ終ると、夜の
霧が彼等の頭上に垂れこめて、その霧が輝くと見る間
に、そのなから崇高な聲がした、「これ我が愛しむ子
わが従ふ者なり、汝等之に聽け」と。

三人は地に倒れ伏してその聲を聞いた、がやがて彼
等の肩に暖かな手がふれた。顔を上げると、そこにイ
エスが平常の様子で粗衣をまといつてた一人立つてゐ
た。しかし、彼等は自分達が永遠に變つたことを意識
した。

死人の中より蘇へるまでは見たることを誰にも語る
な」と、三人にかたく命じた。かうして、イエスは
三人の信仰の高まつた機会を利して、最期のことを語
つたのである。三人の弟子はまた不安になつて、聖約
聖書の文句などをあれこれ記憶にさかしたことであら
う。

「さらば、エリヤ先づ来るべしと學者らの云ふは何
なり」



「昔にエリヤ來たりて嵐の事をあらためん。我汝等に
告ぐ、エリヤは既に來れり、然れど人々これを知らず
反つて心のままに待へり。斯の如く人の子もまた人々
より苦しめらるべし」と、イエスは答へたので、三人
はイエスが洗禮者アハネのことを指して云つてゐるも
のと誤解した。

「何と彼等の信することのおそかつたことよ。彼等は
彼等の現世的成功を、敵を粉砕することを、敵の上に
神の怒を招くことを望んでゐたのであらう。それ故に
イエスは根柢よく基礎の仕事をやりなほして、信仰を
かためなければならなかつたのであらう」

この山上での變貌の翌日、イエスは三人の弟子にと
もに他の弟子のをる所に送り遣ひた。弟子達は一人の
癩癩病みをなほすことができないで困りしてゐた。イ
エスは「あも信なき曲れる代なるか、我いつまで汝
等と憐にをられん、その子を我に連れ來たれ」と云つ
て、直になほしたが、弟子達は何故自分達がなほし得
なかつたか、そつとイエスに訊ねた。

「汝等信仰うすき故なり、誠に汝等に告ぐ、もし芥種
一粒ほどの信仰あらば、この山に、ここより彼處へ移
れと云ふとも移らん。斯くて汝等能はぬこと無かるべ
し」

さうイエスは云ひ、ここで彼等の欲しない製菓の面
に向はせようとして、

「一人の子は人の手に付され、人々は之を殺さん、斯く
て三日めに蘇へるべし」と、再び語つた。しかし、弟
子達は數日前ペテロに激怒したイエスを記憶してゐる
ので、誰も答へる術なく、ただ悲しんでゐたが、その
言葉も彼等に何等の考も抱かせなかつたらしい。

二十一

り、勝利者となるであらうが、誰が高位に就けるであらうかと、嫉妬をまじえて論争がはじまつた。小さな際ではあるが、次第にイエスから離れて論じあつた。

突然イエスは怒ろしい腔で、

「汝等途すがら何を論ずるか」と、とがめた。嘘を云つたと何にならう、しかし彼等はその論争を告白しなかつた。イエスはカペナウムの家にはいると、頂垂れてゐる十二人の弟子達に向つて、全く豫期に反して優しく云つた。

「火もかしらたらんと思はば、凡ての人の後となり凡ての人の役者(付便)となるべし」と。

しかし、この言葉も亦、彼等の抱いた現世的権力の考をくつがへした。弟子達が不服さうな表情をしたからであらう、イエスはそこにゐた幼児を抱きあげて、

「汝等ひるがへりて、幼児の如くならずば、天國に入るを得じ。されば誰にてもこの幼児の如く己を卑うする者は、これ天國に大なる者なり」と云つた。幼児とは、われわれの幼時、罪を知らないあのすなほさを意味したのであり、罪を織りそれを犯して穢れにみちたわれわれに、その幼年のすなほさを取戻せと意味したのであらう、それ故にすぐ「我が名のためにかかる幼児を受くる者は、我を受くるなり」と、附加したのであらうが、その時、イエスに最も愛せられてゐたヨハネが話を遮つて、前日彼等のなしたことを語した。

「師上、我等に従はぬ者の御名によりて悪鬼を逐ひ出すを見しが、我等に従はぬ故にこれを止めたり」と。イエスは彼等を激しく叱つた。イエスは弟子達に、聞かされることを欲しなかつた。その間もイエスは幼児を抱いてゐたのであらうか、そして、幼児は時からの流れようとしたのであらうか。

「我を信ずるこの小き者の一人を踏かす者は、寧ろ大なる石臼を頸にかけて海の深みに沈められんことこそ益なれ」と、云つた。イエスはその時、神の國の道を明かにすると共に、この世を去つたのであらう、そして、この世のことを思ふといつても必ず全身的な激昂を感じないではゐられないのである。それ故、幼児を抱いて叫んだ。

「この世は贖物あるによりて彌復なるかな。贖物は必ず來たらん。されど贖物を來たらす人は禍害なるかな汝の手、又は足、汝を踏かせば切りてすてよ。不具まはば蹙蹙(せま)に生命に入るは、兩手兩足ありて永遠の火に投げ入れらるるよりも勝るなり。もし汝の眼、汝を踏かせば抜きて棄てよ」

しかし、イエスは彼等の眼中に烈しい光が輝くのを見たらからであらうか、汚れた人々を焼きつくすために地上に火を放つのは、淨き人々のなすべきでないことをきこして、彼等兄弟間の激成に嚴格な限界を定めた。先づ警告し、次に二三人の證人の前で諫め、それでもなほ聴かなければ教會が異邦人と見做すといふ風に。そして、お互に罪を犯した者を七度ではなく、七度を七十倍するまでゆるすべきことを命じて、復讐者と復讐者とのたとへばなしまで持ち出して、じゆんじゆんとさとした。

毎年、秋、エルサレムでは「假誕(おぼ)の祭」が行はれた

イエスはこの祭のために十二の使徒をつれてエルサレムへ發足した。取退聞(おぼ)の方、彼は群集を避けて使徒達をしこんでゐたが、恐らくカペナウムやコラジンやベテサイダでは、十二の使徒とともに、イエスは豫期したのであらうに、誰も従はなかつた。そして、今やエルサレムに出發して、生きては歸らないであらうに、この街々の悔改めぬを見て、是等の街で行つたことが無駄に終つたことを知り、この街々の拒否に對して引返つたのであらうか、

「禍害なる哉、コラジンよ、ベテサイダよ、汝等の申にて行ひたる能力ある粟をツロとシンドンにて行ひしならば、彼等は早く荒布を遺、灰の中にて悔改めしならん。さらば汝等に告ぐ、審判の日にはツロとシンドンのかた汝等よりも耐へ易からん。(マタイ十一聲)と、激昂したが、すぐに己の玄妙不可思議な在り方に引返つて、

「天地の主なる父よ、われ感謝す、これ等のことを知者せ聖者に隠して、小き人々に顯はし給へり。然り、斯の如きは御意に適へるなり」と、激昂のぶれれる詞を發した。イエスの心のなかに引きたる人々と神との激しい闘と苦闘があつたのであらう。真れた弟子達はどの詞が理解できなくて、ただ愕然とした呪詛の後に聞いただけに、驚いて銘記したのにすぎなかつた。

イエスは平安な心になつて、今日では有現しか残つてゐないカペナウムやコラジンの町から、眼をはなした。そして十二人の友を伴つて獸々と旅路をつづけた。十二人の弟子は打沈んで、審判の日を思つてゐた

のであらうが、イエスは突然愛情に満ちた聲で、彼等に呼びかけた。

「纏て疲れたる者、重荷を負ふ者、我に來たれ。我汝等を休ません」と。

「主よ、私達は過去を重ねたり裏切つたりしがちな我身がどうにもなりません。この重荷を支へ切れません」と、うつたへたのであらうか。

「我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負ひて我に學べ、されば靈魂に休息を得ん。我が軛は易く、我が荷は輕ければなり」(マタイ)

このイエスの優しい招きは、神の謙遜さを彼等に肉體的にまで感じさせたであらう。彼等は軛の優しさを味つて來たので、最早郷土ベツサイダヤカベナムを失ふとも、イエスを己が唯一の郷土と感じて、エレサレムの旅をつづけたのでなかつたか。

他方、ナザレの近親者達のこの時の態度を見なければならぬ。

近親者はイエスが湖畔の街々を呪詛したのを聞いてイエスに云つた。「此處を去りて、ユダヤに行け。誰にても自ら願はんことを求めて隨に業をなす者なし。汝これらの事をなすからには、己を世にあらはせ(ヨハネ七章)と。イエスは彼を信じない近親者とエルサレムに上ることを欲しなかつた。エルサレムに行けばイエスの身に危険のあることを、彼等は感じてゐながら敢てそれをすすめた。それ故、イエスは彼等に向つて云つた。

「汝等は惜むこと能はねど我を惜む、我は世の所作の悪しきを證すればなり。汝等祭に上れ、わが時い

まだ満たねば、我は今この祭にはのほらす」(ヨハネ七章)

そこで彼は近親者を出發させて、自ら残るやうに裝つて、後でしのびやかにエルサレムに上つた。この最後の旅は避けることができなかつたか、イエス天に擧げらるる時滿ちんとしたれば御願を堅くエルサレムに向けて進んだ」とルカは誌してゐる。彼の時が來たの



だ。

イエスは地上での生涯の曲り角まで來て、ただ獨りでゐたくなかつたらうか。しかし、あの悟りのにぶい十一人の弟子と一人の裏切者とを、何處までもつれて歩いて行つた。

サマリヤを過ぎる時、サマリヤ人はエルサレムに往くイエス一行を阻止しようとした。ところが、イエス

が三つの街を呪詛した調が耳にのこつてゐたヨハネは當然のこのやうにイエスに云つた。主よ、我等が天より火を呼び下して彼等を滅すことを欲し給ふか(ルカ九章)と。

イエスは振返つて、ヨハネのさう云ふのに驚いたが、怒らずに、

「汝等はおのが心が如何なるかを知らぬなり。人の子は、人の生命を亡さんとにあらで、之を救はんとして來れり」と試めたが(ルカ九章)、その彼等を帯びた詛調には神の落膽が聞えるではなからうか。

二十四

イエスはエルサレムの街に忍びこみ、弟子の一人の家に隠れた。しかし人々が彼を探してゐたので弟子の幾人かは見つけられてしまつた。空にあたつて、ユダヤ人等はイエスも尋ねて「彼は何處にをるか」と云ふそれほど彼は疑はれ憎まれ、前以つて罪せられてゐた。イエスが昔て池の邊の下で中風病をなほした事件は、忘れられてゐなかつた。祭日のなごころ、イエスが神殿に居つて説いて答へた時、明かにそのことを仄めかしてゐる(ヨハネ七章)。その時イエスは昔て學んだこともないのに、イスラエルの長でもあるかのやうに堂々と説教した。もちろん、イエスは長ではなく、己れの教を持たないと言言した。教を考へ出したとて何にならう、イエスの教は彼を遣はした父の教であり、彼の光榮は、父の光榮であると、語つた。すると聽衆がぶつぶつ呟いたので、

「汝等何故我を殺さんとするか」と尋ねた。彼等は激

怒して、

「汝は悪鬼につかれたり、汝が汝を殺さんとする者」と叫んだ。ガリラヤ人達は誠意をもつと反駁してイエスを護つた。しかし司祭長達は見抜かれたためにふるへ上り、白晝には放てイエスに手をかけようとはしなかつた。彼等のイエスを怖れる有様が甚だしかったので、ユダヤ人達は「されば彼等も、彼のキリストたることを信するか」と、あやしんだ。

しかし彼の聲が群衆の心を動揺させた。イエスも始と奇蹟を行はなかつたが、人々の心がこれほどかきみだされて、イエスを信じたことは普通でなかつた。それ故、司祭長やパリサイ人等は彼を捕へんと下役共を遣はしたが、イエスも受難に近づき、イエスの言も頂點に於て豫言的閃光を發した。

「我なほ暫く汝等と偕になり、而してのち我を遣はし給へし者の御許へ往く。汝等我を尋ねん、されど逢はざるべし、汝等わがをる處に往くこと能はず」と。

彼等はその意味を悟らず、イエスがギリシヤ人の處に往くのだらうかと云ひ合つたが、それにも拘はらげ彼の語に聞き惚れてゐた。

祭の終の日に、彼は「人もし渴かば我に來りて飲め我を信する者は、聖書に云へることく、その腹より活ける水、川となりて流れ出つべし」と、立つて呼ばつて云つた。

この詞を聞いて、群衆の間には又とない激しい議論が生じた。

「これは豫言者だ……キリストだ……いや彼はガリラヤの人だ、まあ聖書を讀んでみる、キリストはベト

レへんに生れるのではないか……」

しかし、暫くべきことには、司祭長等が彼を捕へにやつた下役共は空手で歸つて來た。

「何故彼をひつばつて來なかつたか」

「この人のやうに語つた者はまだありません」

「汝等も惑かされたか、司達やパリサイ人のうちで、一人だつて彼を信じた者があるか。律法を知らぬこの群衆はのろはれた者だ」

さう叱つたが、下役達は納得したらうか。パリサイ人達は、イエスの言にとれほど魅惑を感じても、聖書の句に就いて知るところから疑惑を持つのだつた。彼等は聖書解經家にすぎなかつたから。しかし、彼等のうちにも唯一人、臆しい下役と同様に、この人のやうに語つた者は一人もないと心の奥で思つた者がゐた。

ただこのニコデモは臆病なほど用心深かつた。昔て一夜をイエスと語りあかしたことがあり、それ以來心は燃えつづけてゐた、火には灰をかぶせてゐたが……

かかるに、その日はありつたけの勇氣を起し、聲をふるはせて云つた。

「我等の律法は、先づその人に幽き、そのなすところを知らないで、さばく事をしていいものだらうか」と

司祭長等は胡散臭い者のやうにやり返した。

「汝もガリラヤ人であるか、聖書を查べて見よ、預言者はガリラヤより起る事なし」と。

かくておのおの己が家に歸つたといふが(ヨハネ七章)、ニコデモは頂垂れて心重く自家へ歸つたに相違ない。(つづく)

次 號

豫 告

小説特輯

長篇 望 郷 (新編) 林 芙美子

短篇 勝氣な女 立野 信之

短編 行商人と雁來紅 和田 傳

短編 慾 望 寺崎 浩

短編 女體三日 田村泰次郎

長篇 聖書物語 (新編) 芥澤光治良

イブセンの 人形の家 (新編) 竹越 和夫

グラビヤ

アメリカン・モード、歌劇「ミカド」、晋妻徳田

パティ・ゲピスの演技、美容師、ティツイターノ

オフセット (二色)

新春の装ひ 田中 千代

小布れの樂しさ 編輯部編

★ 科學的な幼兒教育 山下 俊郎

燃えない家 田邊 平學

モダンブルースの踊り方 勝田 豪

上村松園女史訪問記 本誌記者

美 容 東 ナオエ